

# ごく普通の一般男子たちの異世界冒険論

クラウンフィールド・ソベルバレンタイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ごく普通の男子高校生たちがいろいろするお話。

※この作品は小説家になろう様、アルファポリス様でも掲載しております。

## 目次

天才の死	1
プロローグ	3
混沌としたカオス	5
カオスの先にあるもの	10
未開の世界	13
王の	16
迷い	18
アンドロイドメイド「ロイド」	20
桜柳邸の日常	23
メイドとの出会い	26
ミツマタの能力	28
アンドロイドを作ろう	31
始まりの始まり	33
玉座奪還	37
桜柳帝の普段	40
五感とメイド	43
自転車とメイド	47
ルーフ・ベルファアの逆襲	51
ゼロからの再出発	56
王の隠れ家	60
告白	63
披露宴パーティー	66
殺意	69
ルーフ・ベルファアの終演	75

前日の夜の悪夢	79
アンドロイドメイドは桜柳咲蘭の夢を見るか	81
ルームの本心	84
ルームの秘めた心	86
メイド・ウイズ・メイド喫茶	88
ルームとのデート 誰も忍び寄らない	91
隠れ家のメイドたち	94
お土産	96
砂糖マシマシませそば	99
DE	102
星空	105
先輩の事は信頼していますが、上段に上ったら蹴落としますよ	108
王座奪還前夜祭	111
永遠の日々	116
最終章のカタストロフィーな結末を迎えた終演	123

## 天才の死

桜が散っている。まるで花びらがひらひらと舞っているみたいだ。しかし散った桜を踏む男子が二人いて、情緒を分らない男子二人を俺はため息をつく。

そんな俺の名は桜柳咲蘭。普通の男子高校生だ。成績は全国模試で2位。髪の色は茶色で自分でも鼻が高いと思う。イギリス人と日本人の間に生まれた父とただの日本人の母と間に生まれた、それが俺だ。だからあまり自分では興味ないが、どうやら、俺は、いわゆる、イケメンという部類の男子らしい。まあそんなことはどうでもいいのだが。

女子1「ねえ桜柳くん。勉強教えてー」

女子2「桜柳君は私と勉強することになってるの。横入りはしてはだめじゃないかしらと思うのだけれど」

女子3「あの…桜柳くん。…ぼくと、勉強しよ…?」

女子4「桜柳! 私と勉強しなさいよ。でも勘違いしないでよね!別にアンタのことは好きじゃないんだから!」

女子13「ワタシと、ベンキョーしてくだサーイ!」

俺は目立ちたくないが、こうして女子たちが集まってくる。何故かは知らないが。俺は一匹狼なので、何故俺の周りに女子が集まってくるのか知りたいので、友達がいないので、理由がわからない。だから俺はいつも俺の周りに集まってくる女子を優しく断る。

すると女子は黄色い声を出して失神した。よく分からないが、最近の女子はよく失神するのだ。俺は冷静にそれを無視して、教室を出る。回りの男子は嫉妬した目で俺を見る。何故かは理解できない。しかし俺はそれを冷静に無視して、教室を出る。

すると担任の教師が俺の歩みを止めた。

担任の教師「おい! これはお前がやったんだな?! 鍛えてやる

！」

そう言つて殴りかかってくる。しかし俺はハワイで合気道を習つていたのでそれを交わして殴り返した。すると担任の教師がズシンと地鳴りを起こして倒れた。

俺はこの件を校長先生に話した。すると校長先生は

校長「その教師は退学だ」

俺は俺が退学にならなかつたことに温度しつつ、ため息をつく。この世界は俺の知らないことで満ち溢れている。それを見つけることで世界を解明する事が俺の使命である。今日は高校の入学式だった。

しかし、唐突にそれは起きた。

公園で銀髪でショートヘアで、鼻が高く、顔立ちの整っている美しい美少女が醜悪極まり無いこの世の塵をかき集めたような顔立ちの不細工な男に襲われていた。俺には関係ない話なので無視しようと思つたが、女子がこちらを見て助けを求めたので、仕方なく助けるために走つた。

しかし、そこでトラックがこちらに向かってきた。このままでは女子がトラックに離れて死んでしまう事が明瞭で明らかだった。俺は銀髪のリボンをつけた美少女を助ける為に走る。銀髪で短いスカートをつけた少女を庇ったら、俺は崖へと落ちていった。

そして俺は海の藻屑となつた…

## プロローグ

心が破裂しそうで破けそうになる。

朝の声が枕元で鳴り響いた。

君の声が枕元で反響して響いた。

俺は目が覚めたので、大きく背伸びをしながら口を大きく開けて大きなあくびをしながらご飯を食べる。食べたのは魚の焼き魚と暖かい味噌汁とキュウリの漬け物と茄子の漬け物と新潟県魚沼市産のあきたこまち。食べ終わった俺はブレザーを着て歯磨き粉の付いている歯ブラシを加えながら服を着ながら歯磨きをした。

彼女の声が響いた。

そして学校についた。俺は席について本を読み始めると、授業が始まった。そして彼女の声が響いた。

「ベルファ君、あなたさっき私のことを無視したわね？」

俺はそれを冷静に無視して本を読む。本を読んでいると声が響いて着たが冷静に本気で無視して授業を受けた。

「おい、ベルファ！ これは彼の天才数学者アイザック乳トンでもわからなかった数学の問題だ！ 解いてみる！」

「……こんな簡単な問題が分からないわけないだろう」

俺はペンを持ち授業内容を書きながら無視した。

「私のこと無視しないでよ、ベルファ君!」

そうこうしているうちに一日が終わった。学校が終わったので改札口を目指しながら電車に乗った。



俺の名前はルーフ・ベルファ、俺の将来の夢は突如として行方不明になった俺の親友桜柳咲蘭の搜索である。俺は学校でも桜柳咲蘭を探している。探していたが声が響いて着たので中断した。

だがそれも今日で最後だ。

俺は背中を振り返り、声を響かせる。だが声は虚しく響いていくが

反応がなかった。

「……無視は頂けないな、お嬢さん？」

そこにいたのは彼女の姿。

「ところであの数学の問題はとけたのかね？」

突然現れたのは初老の男性。いや、彼女が初老の男性になったのだ。そして消えて行った。

「……まさかあいつが、な」

虚しく響いた俺の声は誰もいない街に響いていった。夜の帳が落ちた街を歩いていると、世界が優しさを包み込まれるような錯覚に陥った。

そして俺はこれから自分がどうなるのかを知る。夜の帳に光が差し込む。否、それは光ではなく強大な腕だった。勢いよく迫ってくるも強く握りしめられた。目の前が真っ白になり意識が途切れる。

(ちく、しょう……)

途切れる瞬間の意識は混濁し、明瞭ではない。混濁する意識の中なにか耳に聞こえてくる。

(さあ、これはあなたの物語、これから始まるのです)

優しげでどこかおぼろげで冷たいような感触もあって、結局のところどこか落ち着くような声。そして本当に目を閉じた。



## 混沌としたカオス

目を覚ますと、青空が眼下に広がっていた。

「うわあ。まるで、ブルーハワイのかき氷の世界に来ているようだ。たまげたなあ。さつきまで夜のとぼりだったのに。」

そして海の藻屑となった：

身に着けていたスマートフォンが。

合唱を演奏し始めた。頭に響いてくる。カモメのような大きな鳥たちの大きな響く合唱が。

————ラララ ラララズインゲン ズインゲン クレイン  
ヴリンダースラララ ラララ ズインゲン ズインゲンヴリン  
ダース ララ

その曲のリズムを聞いて思い出す。彼女がよく歌っていた歌を。そう、それは某アニメのオープニングテーマであつた気がするがよく覚えていない、それもそのはず、自分がこの曲を聞いたのは幼稚園の頃なので、記憶があいまいなので、彼女が歌っていたという記憶のほろが強く残っていたのだ。思い出していると体に重い衝撃が走り出す。青空だと思っていたのは青い海面だったのだ。

「あなた、こんなところで何をやっているんですか、ついに頭までおかしくなつてしまつたんですか、仕方ないですね、あれ？もしかして私のことを見て赤面しているんですか」

上半身が人間の形をした女のようなナニカが目の前で泳いでる。これもまた彼女なのだろうか。声だけは彼女と同じだ。声の主に向かつて手を伸ばす。しかしその手は空気を斬った。

「ご主人様あ、なんですかこの人間のようなものは、私に触れようとしてきましたよ」

こえの主の後ろからこえの主が現れる。

二人の人物に見えたそれは、実は1つの胴体から伸びていた。こんな、混沌としたカオスのような生物を見たのは初めてであった。うろたえた俺の頭は一瞬で即座に落ち着いて冷静を取り戻す。

「お前は……お前たちは一体なんなんだ？」

「ベルファさん、私のことを忘れてしまったんですか、残念ですね」

俺はその声に覚えがない。おそらく片方の頭は彼女と同じ声でもう片方の頭が見知らぬ人物だということに決まっている。

「そう、私たちは海の藻屑になった後このような体を手に入れました、どちらももとは桜柳でしたがあの事件からこのようになってしまったのです、声が変わったほうがももとの桜柳です」

「桜蘭を語る化け物め！」

確かに俺のスマートフォンが桜柳という銘がつけられていたが、スマートフォンがこんな風になるわけがない。

「あなたの記憶を書き換えたので、私桜柳は美少女キャラクターということでしたつもりでしたが、うまくいかなかったみたいだな、ばれてしまったからには仕方ない」

すると前方の前にいた化け物の形が崩れていく。2つの頭はきちんとした1つの頭になり、下半身も人の形をとり始めた。その姿はまるで最後に見た俺の親友桜柳咲蘭に間違いない。

「さく、桜蘭なのか桜蘭」

目の前の光景が意味がわからなくて頭のなかが錯乱して意味不明

になる。

「まあそんな顔しないでくれよ」

「これが信用できるとでも思っているのか！」

「まさか信用できないのか？」

「おっ、そうだよ」

混乱する自分の頭を落ち着かせようとする。足のばた足の音がよく響いた。

「おれは、お前が、俺に何か言おうとしたのをわかっていたからお前のことを探していたんだぞ」

「行方が消えてどこにいるのかわからなくなったやつがなにを言っているー！」

突然大きな波が俺たちに波打ってきた。

「行方が分からなくなったのはお前、桜柳のほうだろー！ってうわ、なんだこの高波はまさか：お前何をするつもりなんだ？…よくもおれの今までの苦労を打ち消そうとする気だな！」

そうして俺は波に流されて高波に吞まれ流されて行く。やつを置き去りにして俺はその場から流されていった。

意識が飛んでいき、周りが真っ黒になってしばらくしたのち、ガタゴトと列車が走行している音が聞こえてきて、置き去りになっていたはずの桜柳が旧型客車のボックスシートの向かいの席に座ってい

た。

「ここは、この場所は一体どこの場所なんだ？」

「ここはお前の精神世界だ」

「銀河鉄道の夜に出てくるような列車の中が俺の精神世界って、ど  
ういう意味なんだよお」

電車に揺られながら桜蘭を見つめる。桜蘭はまばたきを数回する  
と、窓のそとを眺めた。

「最初は青空だと思ったら、いきなり海の中に入り、今度は満天の星  
空の中を列車で走っているとは、なんという混とんとしたカオスな状  
況なんだよ。俺は理解できねえよもう」

窓に手をつけながら外を見回す。溢れ出す光の粒が俺の頭を占領  
した。

「俺の脳内のキャッシュメモリはパンクしそうだよ。桜柳、お前は  
俺に何をしたいんだ？」

答えようとする口は開かず視界がぼやけてくる。答えようとする  
口が少しだけ開いたのを尻目に俺は意識を闇に落ちた。

「ご乗車ありがとうございます、間もなく終点です。お忘れ物ござ  
いませんようお気を付けください」

そして光に包まれる。

## カオスの先にあるもの

「桜柳、俺を列車でここまで連れてきて何をするつもりなんだ？個人的に旧型客車に乗れたことはうれしかったんだけどさ。まあ、こんな宇宙の果てに來ちまったよ。やれやれ、お前は何を考えているのかさっぱりわからん」

俺は思考をもはや諦めかけていた。俺の親友が実は『彼女』で、おじさんで、ここは俺の精神世界だとか宣ったり、本当に訳が分からない。

「一体これからどうすればいいんだよ」

呟いた独り言に答える声はない。静寂に包まれてしばらくしたのち、足音が聞こえてきたので、足音のほうに歩いてみた。

「思い出とは無価値なモノ、しかし、その在り方はいかようにも変化する。ここは君の精神世界。故に明白。君はいないはずの『彼女』をカンパネルラに当て嵌めている。これは君の思考、そうありたいと思った一つの理想。まあ、『彼女』の生存に関して、君の理想とズレはあるかもしれないがね。」

向かった先にいたのは、いつの日か見た初老の男性。

「お前は数学のじいさん……」

「まあ君にはそう見えるのだろうか」

「まあ忘れるはずはないさ、お前の特徴的な髪形は忘れられない。そんなことはさておき間もなく終点って言ってからなんで15分以上も走り続けているんだ？」

「相変わらず口のきき方がなっていないな、君は。言っただろう、ここは君の精神世界だと。まあこれ以上君にヒントを与えるつもりはない。せいぜい頑張りたまえ」

「なるほど」

俺は頷き納得してじいさんをみて考える。つまりはそういうことか。

機関車のドラフト音は次第に大きさを増していった。

「どうやら理解したようだな。さすが、私の見込んだ男だ」

「……つまりはこういうことだろ——」

そう言おうとした瞬間視界が真っ白になり、意識が飛ぶ。意識をなくす直前に見えたのは、少し笑みを浮かべてこちらを見る老人の笑顔が見えた。

★

ブレーキで列車が停車すると同時に俺は意識が戻ったが、車窓を見てみるとそこには桜柳がよく訪れていた公園の目の前であった。

「懐かしいな……。なあ、いるんだろう。咲蘭」

不意に後方から聴いた事がない声が唐突に耳に侵入してくる

「「「「なあ、咲蘭」」」」

「ちよつとまって、ちよつとまって、俺は桜柳でも咲蘭でもないぞ。中学のころから小説を書くことを趣味としていて、LINEグループで小説を投稿しあつたりしていかつ、数学もできる天才グループ・ベルファだぞ。なんだって俺が桜蘭なんて呼ばれないといけないんだ。もう俺は頭がおかしくなってしまう。簡単じゃねえよ。平常心を保つの」

しかし、簡単でないことを成し遂げるのがこの俺、ルーフ・ベルファだ。

「ああ、なんだよ、そういう事かよこんな事にも気がつかなかつたのかよ俺はよ」

懐に入っている銃を取り出す。銃を取り出した瞬間、一人の少女が声をかけてきた。

「ああ、分かっているさ。数学のじいさんは言っていた。思い出は無価値でも、精神世界ならその在り方は変化する。ならこの少女は無視すべきだ。今、この瞬間、俺が向き合うべき相手は——っ!!」

「あのー無視しないでいただきたいのですが」

気が付くと彼女はキスでもできそうな距離にまで来ていて、俺は一步後ずさりして顔を赤くする。

「何ポーツとしてるんですか、こんなところにいたら流れ弾が当たりますよ」

「俺に流れ弾が当たることを心配してくれてるのかい？ただ、俺には





## 未開の世界

「……あなたは精神世界に連れてきたという話は覚えていますか？」

少女は俺を見つめながら言う。

「ああ脳裏に焼き付いてるよ」

少女から白い光が発光したが特に何も起こらない。

「あなたがこれ以上ここに続けるるとあなたの魂は現実世界に戻れなくなってしまうのです」

「なっ、うっ嘘だろ！」

少女の突然による発言に俺の心は驚きのたうちまわる。

「戻るには一体どうするべきなんだよ!!」

「そうですねえ…戻る方法はあることにはあるのですが…」

戻る方法があると聞いて俺は安堵の息を吐き出す。

「じゃあ、とつとと、その方法をはやくしてくれよ！」

「あんまりオススメはできないんですけどねえ」

「構わないとつととやってくれ」

「じゃあ、死んでもらいます」

「はあ？一体何を…」

そのように言おうとするその刹那、少女の姿が消え去りお腹に痛みを感じる。

少女の腕は俺の身体を貫き、とれる。

「がっ、一体何を…ゴフツウ」

言葉を紡ぐごとくとする口からは言葉ではなく血が出てくる。

「いったでしょう。オススメはすることはできないと。少し苦しみが続わりつくでしょうけど、まあこれで帰還することができますよう」

俺の血が少女の顔面に飛び散る付いているなか、笑顔で言ってくる。

「ぐっ、はあはあ」

大量による出血により視界が点滅してフラフラする。

「ああ、そうそうこの精神世界で起こったことは全て忘れてます。目が醒めると多分違う世界にいると思うので頑張ってください。あと、その世界には桜柳さんがいるので頑張ってください」

俺は体力の限界が底をつき意識を失う…

\$

目が醒める…

視界に光が差し込む

鳥の鳴き声が響く

流れる海から波の音が大きく聞こえる。

「う、うう、」

うめき声を出しながら大きく目を見開く。

青い広大な空に純白の雲とあと太陽がうかんでる。

体を立たせる。

「たしか俺は海の高波に飲まれて、そしてなんかあったような気がするのだが全く思い出せない」

ふとあたりを見渡す。

見たことがない木が生い茂っている。

その中俺は木々の中の生物の気配を察知する。  
しかもそれも大量に囲まれていることが理解できた。

「ぎつと、20〜30つてどこか。襲いかかってきたらたたかわなくてわな」

そのように言っていると木々の間から猿のような見たことがない生物が現れ出現する。

「キシャー！」

一匹の咆哮を機に潜伏し機会をうかがっていた生物共々襲いかかってくる。

「はあ、仕方ない、上下関係ってやつを思い知らせてやるしかないな」  
俺は半身を落とし構え走る。

その一帯はしばらく生物の鳴き声で埋め尽くされた。

「まったく、大して強くもないくせに数だけ多いな」

そう言いながら俺は生物の倒れている大地を見ながら呟く。

「だが、見たことないやつだな。各国の生物図鑑を完読してる俺でもみたことがないな、そして見たことがない植生、そして見たことがない大地、そして見たことがない生物…本当に異世界に来てしまったようだな」

流れる海を見る。

「海の波に飲まれる前…確かに桜蘭とあった。桜蘭は必ずこの異世界にいるはずだ！」

俺はそう決意する。

「さてこれからどうするかな、異世界だから何をすればいいのかわからん」

果たして桜蘭を見つけることができるのだろうか…

## 王の

みんな、お久しぶり。

長らくみなさんをお待たせして申し訳ない。私がこの物語の主人公桜柳咲蘭。見ての通りこの世界では考えられないほどのイケメンだ。

なぜ1話以降俺メインの話がなかったって？

そんなことは簡単だ。俺が毎回主人公で出演してしまうとどうしようもないクズ人間、そう、ベルファアくんのである幕がなくなってしまいうからだ。

さて、今回はどうにも素晴らしい俺のことを紹介して差し上げよう。

まずは、絶世のイケメンである私桜柳咲蘭の紹介だ。

第1話「天才の死」にあるとおり、私の周りにはなぜか女子が集まってくる。勿論それは私の能力、といった類のものではない。ここでわざわざ言及しなくても分かることだろう。

さて、私は美少女を助けた後海の藻屑となったとされていた。しかしながら実際はこうだ。俺は崖へ落ちた際、平行世界の王となった。平行世界と現実世界は同じように見えて違う場所だ。建物や植物の配置は現実世界と基本的に同じようにできている。しかし、その世界を破壊しようと改善しようと俺の思うままになる。だが、俺は知り合いがいない状況で非常に寂しかったので、俺の知り合いであるベルファアをこっちの世界に連れて行ってやった。

ベルファアをこちらの世界に連れて行く前に、あいつがどういう人なのかを知りたかったので、ハニートラップを仕掛け性格を調べたので性格を知ることができたんであった。

さて、もつと俺のことを知りたいだろうが今回は時間の関係で俺のことはこの辺までにしておく。

次はベルファアの説明だ。

そうだな、彼は俺のことを探していた。そう、一言で表せばクズだ。

次に、私の使用人の紹介をしよう。

現実世界にいた頃に集まってくる女子は、いきなり失神したりして使い物にならない奴らばかりだった。だが、こっちの世界にはこのイケメンの俺にふさしん女子がたくさんいたから、俺に慕ってくれると言ったので使用人にすることにした。やれやれ、使用人にして欲しいと頼まれるなんて俺にしては朝飯前だ。

「おい、出てきてくれるかな。」

「「かしこまりました、ご主人様。」」

三人の使用人が同時に話した。

その寸分の狂いのなさはびったりだ。

「それでは紹介してくれ」

使用人1「使用人の、ペンシルです。ベルファの性格を探るためにご主人様のお手伝いをいたしました。」

使用人2「使用人の、ロイドです。」

使用人3「使用人の、ルームです。」

三人とも俺の屋敷にいるときは、正当なメイド服を着用している。ペンシルは、黒髪。ロイドは緑。ルームは紫だ。

この三人は、俺の身の回りの世話をすることは勿論のこと、ベルファの世界で起こさせている出来事を手伝ってくれている。

「ベルファの世界」で、疑問に思った君。とても着眼点が優れた目を持っている。

ベルファは平行世界の裏の世界にぶち込んでやった。その世界の表向きは中世ヨーロッパのそうだ、よくある一般的な異世界だ。その異世界でベルファは絶望の崖っぷちに追いやられていくだろう。

## 迷い

桜蘭を探索し始めて小一時間経った。

広い草原に森が生え広がりそこには一本の道があった。その道をひたすら前に進んでいった。

しかし、1時間歩いて何も出てきやしない。

「そろそろ街とかがあってもいいと思うんだけどなあ。こんな草原のど真ん中に桜蘭はいるとは思えないし。」

青いキャンパスのように広がる空にある太陽が暖かくする。

しかも一陣の風が通行する。だからだと汗が流れ出る。

「あつい、あつい、あつい。干からびちまいそうだ。ちくしょうあの女、俺をこんなところに連れてこさせやがって。」

「あつい、あつい、あつい、煮干しから梅干しになっちまうよ」

体中の水が体中から水蒸気のように飛び散る。

「まずい…目がフラフラする…」

水が飛び散ることによって体力が消耗し視界が安定しなくなっていく。

「腹も減って来た…何か飲み物と食料を探さないといけない」

そのように森をさまよっていると水の音が聞こえてくる。

「こっ、これは水…」

どこからともなく溢れ出る体力で疾走し音の現場へ向かって行く。

現場に到着すると小川が流れていた。

「水だ！水だ！水だ！水だ！」

俺は小川に顔面を突入し水がを口からどんどん入れていく。

「ふう、なんとか生き返った、ここに魚とかいけば最高だったんだよ」  
腹の音が放たれる。

「とりあえず、食料を探しながら川に沿って行くか。小川だけど飲み水には困らんしなんかあるかもしれないからな」

そうして川に沿って走行していると、遠くに建物らしき何かが発立されていた。

「あれは、建物…もしかしたら誰かいるかもしれない。」  
建物に近づく。

「キヤーー！」

中から悲鳴が聞こえてくる。

俺はそれを耳に入れると跳躍する。

跳躍したのち加速度をつけて建物の天井を突き破る。

「なっなんだー！」

突然の侵入に驚く人物、その傍らには人が地に伏せている。

「なんだこいつはいきなり天井突き破って来て！」

「くっ、間に合わなかったか」

地に倒れている人物に目を見開き観察していると、眼前の男が手斧を振りかぶってくる。

「死ねえええええ！」

俺はその振りかぶった手首を掴み横に一回転させ投げ飛ばす。

「うおおわわわわわわわわわ！」

投げ飛ばされた男は即立ち上がると逃亡して行く。

「チツ、逃したか」

逃げた男の背中を見たのち倒れている人物に目をみむける。

「遅かったか…」

倒れている人物は女性で斧が刺さった痕跡が見える。

俺はその人の墓を建てる。

そして家の中を物色する。

探しているところの周辺の地図を見つける。

「こんなこと、泥棒と同じことだけど…」

俺は地図と最小限の食料を持ち、出発前に墓に手を合掌し旅立つ。

「このまま行けば街に出るか…とりあえず行ってみるかな…」

そうして森を抜けて行く。

## アンドロイドメイド「ロイド」

「……あつい。頭が沸騰して茹蟄になってしまっそうだ。」  
両面に広がる砂漠。

意味不明な動きをするフンコロガシ、そして、大地を震撼させる風、  
あと空を照らす逆光。

草原のときのほうがまだ快適だった気がする。

地図によるとあと2時間ほど歩かなければ街にはたどり着かないらしい。

「基本的にこっちの世界は暑いなーまったく。さっきの森で水を含んどけばよかった。」

周囲には人間はおろか生物すらいやしない。

……と、思っていた矢先、前から漆黒の影をまとったよくわからないようなものが近づいてくる。

「なんだあれは」

よく見ると影の中からメイド服のようなものが発見できる。

漆黒の影はまっすぐと直進し、その動きは不気味な速度で疾走するがごとく近づいてくる。

そして自分の目の前に現れた。

「あなたは、ルーフ・ベルファ様ですね。」

緑髪のメイドは淡泊とした声で話しかけた。

目が髪で隠れていて表情がよく読み取れない。でも、もしかして、ひよつとしたら、結構美人かもしれないぞ。

「ああ。」

「ご主人様……桜柳咲蘭様の第二使用人のロイドです。ルーフ・ベルファ様をご案内しにまいりました。」

桜柳の使用人だと。しかも第二？すごい身分になったんだなあ桜柳も。

使用人ってことはつまりメイドってことか。

桜柳のやつ、こんな美人をメイドにしやがって。

いつそのこと俺のメイドにしてやりたいものだ。



まあ、桜柳がこの世界にいるということが確信に変わった。

「しかし、タダとは言いません。あなたがこの世界で犯した罪は大きいですから。」

「……は？」

「ベーシック・インプット・アウトプット・システム起動、バトルオペレーティングシステム、空間制御ドライバ、読み込み完了。シユバルツダークマター!!」

メイドが叫んだその瞬間周囲は真っ黒な暗黒な漆黒!あと黒い太陽に包まれた。

「なんなんだこれは!!!」

周囲を化け物のようなものに囲まれる。

それはまるで、カオスと混沌が混ざり合ったような物体だ。

周囲をかこむ化け物は、いきなり空を舞いあがった。

そして、暗黒な漆黒へ青白い光を降り注ぎ始めた。

それはまるでブルーハワイのかき氷をライトで照らして宙を舞っているようであった。つまり、花火みたいな感じだ。

「……許せない、ペンシルをあんな風に扱って!!」

先ほどの周囲をかこむ化け物が爆音を放ったのち、メイドは怒り狂った表情で俺を睨み付ける。

「は？ペンシルって誰だよ!」

なんなんだ、なんなんだ、なんなんだ!全く理解できんよ!

ペンシルってペンのことか?筆記用具に何かをしたというのか?

「あそこまでのことをしておいて忘れたのかああああああああああああああああ!」

どうにも理解できない。何が起きたんだ。

「あそこまでつて。俺が一体何をしたっていうんだよ!」

「そうですか。覚えていないんですか。わかりました。」

するとメイドの姿がいきなり消えた。すると、背中に今まで感じたことのないような電流が走った。

「——おい、いったい、おれは……何を……したと………というんだあ」

「ペンシルにあんなひどい辱めを受けさせたのにもかかわらず覚えていないとは。よくここまでぬくぬくと生きてきましたね。まあ、私の用事はこれで終わりました。ご主人様がお待ちですのではやくいつてくださいね。ちなみに、ペンシルはあなたが列車から降りた時に初めて会った人のことですよ。」

俺の脳内に直接話しかけるようにしてメイドは俺に話した。  
気持ち悪い感触だ。

ペンシルって、あのロリのことだったのか。このメイドと一体どんなつながりがあるっていうんだよ。

「シユバルツ・フィールド、解除」

メイドは機械のような冷たい声で呟き、暗黒な漆黒のような空間は解かれたのであった。

そして俺は、気を失い砂漠のフンコロガシの餌食となるのであった。

## 桜柳邸の日常

「ご主人様、ルーフェルファ様を連れてまいりました」  
「ごくろう」

聞き覚えがある声。そうだ、さっきのメイドと桜柳だ。俺はさつき死んだはずだが。

「お、お前は、桜柳だな。お前俺になんの恨みがあつてこんなことを。よくも俺の心を踏みにじる気だな。」

「ご主人様に向かつてこのような口を着きくなんて。許せませんね」

ロイドは手から直流を走らせる。

「ロイド、まあいいさ。こいつはそういうやつだ。」

「ですがご主人様」

「……ベルファ。お前はどうしようもない奴だな。見ていて面白い。」  
「な、なんだって」

久しぶりに桜柳に会えたと思つたらこのざまだ。俺はここに来るまで何のために……

「ペンシル、ルーム。君たちも出てきてもらつても構わないかな」

「かしこまりました。ご主人様」

部屋の奥の部屋から2人のメイドが出てきた。黒髪と紫髪のメイドだ。紫髪のメイドは、床までつくようは長髪で、髪で片目が隠れていて、滑らかな髪だ。なんというか、ペンシルやロイドと同じ程度な美人だ。

「お前が置かれている状況を説明してあげよう。」

桜柳は塵を見下すような表情で言った。

「まず、3人のメイドの紹介だ」

メイド(ペンシル)「桜柳様の第一使用人のペンシルです。ご無沙汰しております。あなたのどうしようもない性格は全く変わっていませんね」

メイド(ロイド)「先ほどはごうも、ロイドです」

メイド(ルーム)「ご主人様の屋敷内での身の回りの世話をするルームです」

3人のメイドが棒読みで俺に自己を紹介をする。

「な、なんなんだいったい？」

「私の使用人だとも。お前に、は一生持てないものといってもいいのだろうか。」

ベルファ「は？」

桜柳は頭がおかしくなってしまうたのか？そうに決まっている。人の心情は移ろい行くものだっていうけどこんなに変わるとは驚きものだ。

「まあいい。ロイド、ペンシル、ルーム。今のこいつの身に起きている状況を説明してやってくれ」

「了解しました。ご主人様」

3人のメイドは俺の目の前に立った。ペンシルが正面で立っていて、ロイドが左斜め前で立っていて、ルームが右斜め前立っていた。

ペンシル「ルーベルファ様、率直に言うとおあなたはご主人様の逆鱗を逆なでしました」

ロイド「ご主人様の第一使用人であるペンシルを自分の欲望を押しえられずに欲望の赴くままにし、」

ルーム「異世界の住民の所有物を強盗し、」

ペンシル「神聖な川の水を汚しました。」

ロイド「その罪は重く」

ルーム「死刑では足りないぐらいのとても重い重罪です」

3人のメイドが順番に話している状況はまるで悪夢を見ているような不気味さを感じる。

「結局のところお前は、犯した罪を償うために何度も死んでもらうつてわけだ。」

「は？どうしてだよ」

「そんなものに理由などあるわけないだろう。この世界は俺のものだ。つまり俺がやりたいとおりに動く。なあ、ペンシル、ロイド、ルーム。」

「二その通りでございませす。ご主人様。」

三人のメイドは寸分の狂いもなくそろって言うのであった。

そして、桜柳にべったりとくつつくのであった。

「俺はお前のことが好きだから、お前のことを探していたんだぞ」

「ところで、ペンシル、ロイド、ルーム。このあほ野郎を次はどうしまつしようか」

「ご主人様の思うようになさるのがいいと思います。」

ペンシルは赤く完熟したようなリングゴのように顔を赤らめながら、桜柳に提案するのであった。その声の甘さといいべっとり感は今まで聞いたことがない。その声は、ドロドロな砂糖のような甘ったるい声だ。

「そうか」

ペンシルの頭をなで桜柳は言った。

「それじゃあ、永遠に異世界転生させて必ず死ぬようにさせるか。何度も死に、何度もやり直し、絶望に諦める。素晴らしいと思わんかね」

「「さすがはご主人様です。考えることが斬新で合理的です。ご主人様のような素晴らしい方のメイドになれて私たちは幸せです」」

「ふむ。ではロイド、また適当な世界にぶち込んでやってくれ」

「承知しました。」

「ベーシックインプットアウトプットシステム起動。テレポーターシオンソフトウェア起動。テレポーターシオン、実行。ご主人様の想像する異世界へ。」

すると視界が真っ暗になった。

## メイドとの出会い

それは桜柳咲蘭が異世界に転移したときのことであった。

「俺は銀髪の美少女を助けた際にトラックにひかれ海に転落したのであつたのだが、なぜこんなところに……」

桜柳は薄暗い旧型客車の中のボックスシートに座っていた。

機関車のドラフト音が車内に響く。

そう、この列車は以前ベルファが桜柳によって連れてこられた列車だ。

「車内販売でございます。冷たいお飲み物、おつまみはいかがでしようか」

「あ、すみません。何か軽食とかつてありますか？」

「はい、マヨネーズクッキー、ゴキブリの素揚げ、ミルワームの岩塩焼き、砂糖マシマシ油そば、チョコレート焼きそばパン、ショートケーキカップラーメンなどがございますが」

「まじっ？」

見たこともないようなお品書きにおのき驚く桜柳。

「お客様もしかしてこちらの世界に来て間もない方ですか？」

「ああ。トラックにはねられて海の水雲モクズになったような気がするのですがいつのまにかこの列車の中にいます。」

「左様でございますか。お客様はすでにご存じ理解されているはずの通り。もう死亡してしまいました。そしてこの世界の住人となる予定です。」

「この世界の住民って、まさか異世界転移ってやつですか」

彼はハワイにいた時とても暇だったので、ネット小説で異世界転生ものの小説を読み漁っていたので、それが実現となり驚きを隠せずにいた。

「異世界転移……そのような言葉は聞いたことはありませんが。この列車はそのようなお客様が多数ご乗車なさいます」

「そうなんですか。あ、とりあえず、さっきのおつまみですが僕が持っている通貨はこの1万円札と500円玉、100円玉しかないのです

「買えます?」

「少々お待ちください」

そういつて車内販売のウエイトレスはカバンから機械のようなものを取りだし俺の1万円札と、500円玉、100円玉をその機械の中に入れた。

「お、お客様。これはミツマタですね。こんなすごいものを持っているなんて。どこから手に入れたんですか?」

ミツマタとは1万円札の原料であり、俺の元居た世界では普通にあつたものだ。まさか1万円札が役に立ったとは。

「お客様、もしこんな私で良ければ……その、結婚していただけますか」

「結婚って……そんなにすごいものなのかこれ」

「はい。ミツマタをこんなに大量に所持しているなんて……この世界では考えられません。」

彼は元の世界にいた時から、もともと女子たちが集まりやすい体質であつたのだが、結婚まで迫ってくるのは初めてであつた。

「さ、さすがに結婚というのは早いですよ。そうですね、メイドでしたらいいですよ。」

「お客様のメイドになれるなんて……私もう、うれしくて仕方がありません。私、ペンシルと申します。いつまでもお客様……いいえご主人様についてまいります。」

こうして桜柳は彼自身の初めてのメイド、ペンシルと出会つたのであつた。

## ミツマタの能力

——まもなく、終点です。

桜柳に乗せた列車は終点へ到着した。15両で出来た列車であったが降車する人の数は数えられるくらいしかない。数えるくらい乗客の表情は皆薄暗く、死んでいるような眼をしていた。改札に向かっているとそこは石畳の道路にレンガ造りの建物が立ち並んでいた。

「ここは、いったい……」

俺は日本とハワイにしかいたことがなかったので、このような光景を見たのは初めてだったので、驚きを隠せずにした。そして驚いたのはこれだけではない。今まで俺がいた世界では架空の存在であったエルフがいたり、今じゃ考えられないような着物を着ている人たちが歩いている。

「まるで俺が読み漁っていた小説家になろうによくある世界観だな」

ため息つきながら言ったすぐに、桜柳はハワイで読んだ異世界転生物の本によくあるパターン、異世界で王になって無双するという手段を思いついたのであった。

「とりあえずその辺を歩いている人に王が誰なのかを聞いてみるか。そいつの立場を乗っ取っちゃえばこの世界は俺のもんだ」

しかし、その辺を歩いている人はどうも貧しそうな雰囲気漂っている。その理由は何なのだろうか。

そうこう考えながら、大通りの裏の裏路地に座って居眠りをしている、ぼろぼろの布切れのようなみすぼらしい服を着て、裸足で、ぎつくばらんに切れた紫髪の長髪の少女に声をかけた。

「もしもし、僕は桜柳咲蘭さくららなざくららんというんだけど、君の名前を聞いてもいいかな？」

「私はルーム……」

ルームは地面を向いたまま答えたので、顔を見ることができなかった。

「ルームさん、どうして君は下を向いているの？」



「顔を……見せたく……ないからです……」

俺が言っても、ルームは顔を見せたくないと言い続けた。

「僕は、どんな顔であろうが馬鹿にしたりはしないさ」

「そんなことはない……私はいろいろな人から馬鹿にされて……」

ルームは泣き出してしまった。自分がしてしまったことを後悔しているのだが、後悔だけではルームを救うことができない……

——なにかできることはないのか

そう考えていると、先ほどまでいたペンシルが現れた。

「ご主人様、到着が遅れて申し訳ありません。ご主人様についていきますといったのにもかかわらず……」

黒を基調としたメイド服に身を包み、ホワイトブリムをかぶって、優雅な足取りで歩くペンシル。駅に着いた瞬間に辞めて、俺のところまで来てくれたらしい。

——そうだ、ペンシルなら何かこの子を笑顔にさせてあげられることはできないだろうか。

「ペンシル、さっそく君に相談したいことがあるんだ。この子は顔に強いコンプレックスを抱いていて泣いているんだ。なにかこの状況を打開できる名案はないかな……」

するとペンシルはきよとんとした顔で言った。

「ご主人様、あなたにはミツマタがあるじゃないですか。そのミツマタを1グラムほど使えば、彼女をあなたが思うような姿にすることができますよ」

なんてことだ、たかだか1万円札のミツマタにこんな力があるなんて……

早速、ミツマタを使いルームの姿を絶世の美少女のような姿にした。

するとルームは、

「うっ、うっ、私がこの姿に戻ることができるなんて……実は私、5年くらい前に両親を亡くし、街をさまよって新しい仕事を見つけたのですが、運悪くその雇い主は暴力を趣味とする人で、私のことを暴行しつづけ、このような姿になってしまったのです」

「それはつらかったね。元の姿って言ってたけど、もしかしてこの姿が元の姿なのか？俺は頭のなかでお前の雰囲気合うような姿を想像してこの姿にさせたんだけど」

「まちがえなく、5年前の私の姿です。私、桜柳様のような方に出合わなければ……一生立ち直れませんでした。」

「俺のミツマタってこんなことができるのか」

自分がしたこと少女を助けることができた。俺は人の役に立つことは嫌いではないのでともうれしかった。

「もし桜柳様がよければ……私、桜柳様に一生ついていきたい……の……ですが……」

「そうな、隣にいるペンシルは僕のメイドなんだ。君もメイドになつてくれるかな？」

「はい！なりたいです。桜柳様のメイドになれるなんて……私もううれしくて仕方がありません……」

「そういえばペンシル、ミツマタってほかに何に使えるんだ？」

「こんなことができるというより……ミツマタを使ってできないことを探すほうが難しいんです」

「な、なんだって！」

ミツマタを所持している俺は、何でもできる。

つまり、

「この世界の王になることもできる」

!!!!!!!!!!!!!!

## アンドロイドを作ろう

ペンシルとロイドと俺は異世界の道歩く。

周りの視線はなぜか俺たちのほうを見ている。そして、理由はわからないがうらやましそうにしている。俺も海の藻屑になる以前は、周りにうらやましそうにされたが、親友がベルファしかいなかったの  
で、特に興味もなかったので理由を調べようとはしなかった。

「ご主人様、なんだか周りの人がじろじろ見てますね」

「そうなんだけど、なんで見ているんだろうね」

「なんでか周りの人が私のことをずっと見ています。以前まで目をすぐにそらされたのに、今はじろじれ見てきますよ。目をそらされるのも嫌ですが、じろじろと見られるのもいい心地がしませんね」

「あ、ルームのことはいつでも見たい時に好きだけ見てもらっても構いません。いいえ、ずっと見ていてほしいです」

「あつ、えつ、わつ、私もご主人様にならずと見ていてほしいです!!!」  
「俺も君たちになら見ていても飽きないよ」

以前の世界にいたころの女性は、みんな同じような顔で見る気にもならなかったがルームとペンシルは見ない理由などない。

「おいてめえ、女二人もつれて何やってんだ！しかもお前見ない格好だなあ！出すもんだしな！そしたら手は出さないでやる！」

そう言うのと、いかにもな男が俺に襲いかかってきた。やはり俺はハワイで合気道を習っていたので、被害を防ぐことが成功だった。

「暴漢相手に戦うことができるなんて！ミツママだけでなく実力でもすごいんですね！ご主人様のメイドである私がもう、もったいないくらいです」

「わ、私も、ご主人様のメイドになれて幸せです」

「やれやれ、暴漢なんて大したことないな」

しかし、王の立場を奪おうとしている俺の不足としては、自分の合気道の実力だけでは不十分がある。

そうだ！戦闘用のアンドロイドをつくらう！

桜柳は、財布から1万円札を取りだし少しちぎり、次の言葉を話し

た。

「戦闘用、メイドアンドロイド！」

ちぎられた1万円札から白い光がはなたれた後、しばらくしたのち、緑髪のメイド服姿のアンドロイドが誕生した。

「はじめまして、桜柳様」

「はじめまして！ミツマタってなんでもできるんだなあ。」

「桜柳様を作ってくださいならなければ、私は生まれてくることもできませんでした。ありがとうございます」

「ご主人様、この子の名前って決めてませんよね」

「ああ、そうだな、じゃあロイドでどうだ？」

「ロイド！私らしい素晴らしい名前です！ありがとうございます！」

そして俺は、王の座を奪還する土台を固めて万全であるのであった。

## 始まりの始まり

黒髪で小柄なペンシル、長髪で紫髪のルーム、アンドロイドのロイド。

3人を連れて俺は王がいる王都に歩く。

「王都までの道のりは歩いて6時間ほどです。この草原を抜け、森に入り、砂漠を抜けましたら王都ですね」

地図を見ながら第一使用人、ペンシルが答える。

「ご主人様と一緒になら、6時間の道のりも一瞬です」

6時間……距離にすると30kmくらいだろうか。車で行けば一瞬の距離だが歩くとなると足が棒になりそうだ。どうにかしてでももつと楽をしたいものだ。そういえば、ミツマタって車も作れるんだろうか。

桜柳はミツマタを一かけらちぎり呪文を喋った。

「自動車！」

するとミツマタは瞬きする間に自動車に変化した。

「ご主人様、なんですかこれは？」

「これはね、自動車というんだ。早いスピードでどこまでも行ける俺がもともといた世界の乗り物だよ」

俺はハワイで自動車の運転も習得済みなので自動車で王都に向かうこととした。

しかし、運転席に座りエンジンをかけようとしたが、うんともすんとも言わない。

「あつれーおかしいな、エンジンが始動できない……そうだ、ガソリンがないからか！」

俺はガソリントタンクに一万円札をひとかけ放り込み、

「ハイオクガソリン！」

と騒いだ。

そして運転席に戻りエンジンを始動するとエンジンが始動し自動車を運転できる状態にすることができるようになった。

「な、なんですかご主人様！いきなり爆音と爆煙が放出されましたよ」

「あー、大丈夫大丈夫。とりあえずみんなもこの車の後部座席に座つてよ。」

「こうぶぎせき?」

「あー、ここだよ。ここに座つて」

そして、俺はアクセルを踏み倒し時速120km/hまで加速した。

流れるような景色に、メイドのロイドとルームとペンシルは、

「さすがはご主人様です!こんな便利な道具を一瞬でつくつてしまうなんて!」

「自動車をつくるなんて大したことないさ」

アクセルをどンドン踏み、草原を抜け、森を抜け、川の中を走り、砂漠に入った。

「ご、ご主人様。ここは砂漠なのにちっとも暑くないです。もしかしてご主人様、魔法を使って空気を冷たくすることもできるんですか!?!」

「あー、これはエアークンディショナーつていつて……まあこれも俺が元居た世界の技術さ」

「でもご主人様はすごいです。いいえ、最強です!」

「ご、ご主人様。私をつくつてくれてありがとうございます」

「わつ、私も人生を変えてくれてありがとうございます!」

「みんな、僕も君たちをもっと幸せにできるように頑張るよ」

「!さすがはご主人様です!」

三人のメイドの目はとろけるような甘い目をしているのが、バックミラーから見る事ができた。

数分後、砂漠を抜けた俺たちは王都に到着した。

先ほどの駅があつた街とは、雰囲気全く違う。建物の裏路地に浮浪者はいない、みな元気そうな顔でまちを歩いている、商売が盛ん、高そうな高給で見た目が華やかで華美な服を着ているような人が街を歩いているので、とても栄えていることがよくわかることから、ここは王都だということを実感することができることから、俺の王の座を奪おうという気持ちの昂りは抑えることが二度とできないような高

ぶりになった。

「ご主人様、さっきのまちではうらやましそうな目で私たちを見ていましたが、王都では化け物を見るような眼で見えていますね。やっぱり、ご主人様が作り上げた車が珍しいからですね」

「ご主人様、私は生まれてから間もないので見るものすべてが珍しく感じますが、こんなにすごいことだって言うことがよくわかります。さすがはご主人様です！」

王都のメイン通りを抜け、王が住んでいるであろう立派なお城に到着した。

「王様が住んでいるお城の建物はじめてみました！こんなに立派なんですね〜♪」

そう、立派な建物だ。俺が住むのにふさわしいくらい大きさ、華やかさ、きらびやかさは美しい。あと、広い庭園も。

屋敷の周りを周回するとだいたいどのようにつくりになっているのかがわかったので、門番のところまで行くことにした。

そこには、いかつい男二人が甲冑をかぶり警備している。

さつきからずっと俺たちのほうをにらんできている。まあそうするのもし方ない。こっちの世界では物珍しい自動車に乗り屋敷の周りをぐるぐる回っているのだから。

もちろん俺は、そんな門番などにかまっている暇はない。

門番を車ではね飛ばそうと思ったが、下手気に車が傷ついたりすると修理するのが大変なのでやめることにした。やはり、ここは会話で何とかするしかないだろう。

「もしもし、王に会いたいんだけど王はいるかな？」

「貴様、こんな見知らぬ物体に乗りこみ、奇抜な格好をしている奴に王に合わせられるわけないだろう！今すぐ帰らなければお前を真っ二つにするぞ！」

門番とは言葉が通じそうもないのでとつとこの場を何とかしたい。

そう思ったやさき、戦闘用アンドロイドメイドであるロイドが車から降り、

「ご主人様、私が何とかして見せます」

「ロイド助かる！」

「インプットアウトプットシステム起動！空間制御ドライバー起動、範囲指定、門番の周り、時空ストップ！」

すると、門番は氷のように固まり動かなかった。

「さすがはロイド！すごいですね」

「私にできることは戦闘のみ。戦闘でご主人様のお役に立ててうれしいです」

「ありがとうございます。ロイド！」

厄介払いができたので、さっそく屋敷に乗り込む。

「ご主人様、私もちよつとした魔法のようなものを使えるのでご主人様のお役に立てるよう最善を尽くしてまいります」

ペンシルは、ペコつとお辞儀をしながら言った。するとルームは泣きそうになりながら、

「ご主人様、私……何も……できなくて……すみませんご主人様さまあああ」

「そうだルーム！ちよつと待つてな……『トランシーバー！』」

ミツマタが、2つのトランシーバーに変化した。

「これを使うと俺と会話ができることができる。君は屋敷の外の藪のところまで危ない変化がないか見張つて、もし何かがあったらこいつを使つて連絡してほしい」

「離れたところで会話ができるなんて！ミツマタは、発想力がないと使いこなせない代物……それをそう簡単にたくさんの便利なものを作り出してしまふなんて。本当にすごいです！」

こちらの世界にはトランシーバーや自動車といった類いのものは発明さえしていなかったようだ。そうと知れば、王都の戦いはハイテク機器を使いこなすほかにあるまい！

王の立場を奪う戦いは始まり始めた。



## 玉座奪還

清々しい陽気、心地よい風。すべての条件が好条件で王の座を奪還する状況は整っている。そして、ペンシル、ルーム、ロイド。三人の仲間たちが俺をサポートしてくれる状況で王の座を奪還することを失敗するとは考えにくい。そう、もう恐れる必要などはない。もともとなかったが。

「じゃあみんな、そろそろ実行し始めるよ」

「はい！ご主人様。ご主人様なら絶対に成功します」

3人は輝いた眼で俺のことを見る。3人の信頼は厚く俺のことを常に応援してくれている。とても心強い。

「その前に、僕の1万円札はもう半分しかない。これだとちよつと寂しいんだが……」

「そうですね、さすがにそれは少ないですね……ご主人様なら何とかなりませんか？」

ミツマタの性質は作りたものの名前を言えばその形に変化できる。ということとはつまり……

「二万円札！5000兆枚！」

半分しかなかった1万円札は、5000兆枚の1万円札に化けた。

「ご主人様、なんですかこれは！貴重なミツマタをこんなに増やすなんて！」

「ミツマタは、作りたものの名前を言えばその形に変化できる性質があります……その性質を使ってミツマタそのものの量を増やすなんて！」

「こんな発想普通の人には思いつきません！やはり私たちのご主人様は天才の域を超過しています！」

三人のメイドは赤面を紅潮させる。この発想がこんなに素晴らしなものだとは思わなかったので俺は三人のこの反応に若干の驚きを覚えた。まあちよつとひねくれた考えなのだろうか。同じものを何枚も複製するということは。まあ所謂逆転の発想ってやつですよ。

「これだけあれば安心だ。それじゃあ屋敷に乗り込もうか！」

門の前で寝ている門番をあとにして屋敷に侵入する。屋敷内は高そうな絵画、高そうなカーペット、高そうなシャンデリアなどがある。この世界を牛耳っている王なのだから、これくらいのもを所持しているのもまあ理解ができる。しかし、駅前の人たちが苦しんでいるような状況を見てなんとも思わないなんてひどい王だ。そんな王を首にして俺が王になっても誰も悲しむ人はいないだろう。

屋敷内を物色していると、剣を持った人が現れた。

いかにも強そうな人で街であつたら速攻警察を呼んで銃刀法違反で捕まえたくなるような風貌だ。

「お前はどこから入ってきた」

「ロイド、頼んだ。」

「ベーシックインプットアウトプットシステム起動！空間制御ドライバ！起動、範囲指定、いかにも強そうな人の周り、時空ストップ！」  
剣を持つてるいかにも強そうな人は動きを止めた。

厄介払いができたので、王がいそうな場所へ進む。

一階の部屋を総当たりしたが、誰もいない。この屋敷は2階建てなので、王がいるのは2階だと考えられる。玄関から正面にある立派ならせん階段を上り2階へ上る。

すると、奥の部屋に王が住んでそうな部屋があつた。その部屋のドアはほかの部屋とは違うもので高級感があつた。

ドアをけ破り、中にいたのはいかにも王様のような恰好をした人がいた。

「はじめまして、桜柳と申します。王の座を私に下さい」

「ああ？」

「王の座を私に下さい。王の座を私に下さるなら何もしませんから」

王は何が起きたかわからないような表情をしている。

平和ボケをしている証拠だ。

「なぜおまえなんか王の座を渡さなければならぬ。よくもおれののんびりとした生活の邪魔をする気だな。おい、こいつを切り捨てろ」

「異世界空間に通じるゲート！」

桜柳がこう叫ぶと、異世界に通じるゲートができた。

「ペンシル、王と周りにいる人、時空をストップさせた人をこの中にぶち込んでもらっていいかな」

「承知しました」

笑顔でうなずくとペンシルは、

「ロイド、魔法をかけるときにこいつらが動くと面倒だから、そいつらの時空を止めてくれるかな？」

「わかりました」

ロイドが呪文を唱えると王と周りにいる人の動きが止まった。

するとペンシルは、そいつら腹を触り異世界へぶち込む呪文を唱えゲートを使って異世界にぶち込んだ。

「終わりました。ご主人様」

「ごくろう。それじゃあ俺が王になったわけだからこの世界の住民に通達をしておいてくれ」

「承知しました」

「ルーム、王の座を奪うの成功したからこつちにおいで」

トランシーバーを使い、ルームに連絡を取る。

「わかりましたご主人様。本当に私心配で、成功して嬉しいです！」

三人が集まり、お祝いをして俺が王になったのであった。

## 桜柳帝の普段

俺が王に即位して1か月。ロイド、ペンシル、ルームは俺のメイドとしてかなりなじんできた様子だ。メイドになりたての頃のぎこちなさはなくなり今では家族のように仲良くなった。

午前7時、俺とロイドとペンシルは食堂に集まり桜柳邸の静かな朝を迎える。

「ご主人様、今日の朝食を用意しました。ご主人様が好きな味噌汁と岩魚の焼き魚です」

ルームが調理した朝食がやってきた。

「おっ、おいしそうだねえ」

わかめと溶き卵の味噌汁、近所の川に住んでいた岩魚を塩焼きにして焼いたもの。焼き加減と塩加減が絶妙でルームの味覚にはいつも驚かされる。

「ご主人様が、ご主人様が以前いた世界の料理を教えてくださいのおかげです」

この国に最初に来て驚いたことは、料理のメニューのセンスが常識を超越している点だ。鉄道会社のウェイトレス時代のペンシルが紹介した「軽食」のメニューは今でもはつきりと覚えている。興味がある方は、「メイドとの出会い」をもう一度読んでいただきたい。

話がそれてしまったがこの世界は料理のメニューだけではなく調理方法もなっちゃいなかった。この辺は山の頂上付近で標高が高いので、周りに流れている川は上流なので岩魚をはじめとしたおいしい魚を釣ることができる。しかし、このようなおいしい食材があっても調理方法が残念であったらどんなに高級な食材もタダの生ごみとなってしまう。

「魚に塩をつけるのと、ガスコンロを使うだけでこんなにおいしく簡単に料理が作れるようになったなんてやっぱりご主人様は天才です」

やれやれ、異世界は調理方法がとてつもなく遅れているという話はネット小説でよく読んだのであるが実際にこうなっているとは驚きを隠せなかった。普通に考えて、塩をかければある程度おいしくなる

と思うんだが。

朝食を済ませた後は、異世界の住人から届いた意見に目を通し、それを何とかする。前の王の時代と違い、今は住民が自由に意見をすることができるようになり王である俺に対する信頼がとてもし大きくなった。なので、住民が反乱を起こすこともまあ考えられないだろう。

「最初ご主人様が、住民から意見を聞くなんて言ったときは王なのになんでこんなことをするのかと思いましたが、1か月たつとやっぱりご主人様は天才だということがよくわかります。」

ペンシルは書類を整理しながら俺に話す。

そうそう、ペンシルは魔法だけでなく書類の整理が得意なのだ。

ちなみに俺はミツマタでパソコンをつくったのであったが、それはペンシルの仕事を減らしより高度なことをするのに貢献することができた。

このような日常はあつという間に過ぎ、日が暮れた。

「お休みなさいませ、ご主人様」

ペンシルとルームはそれぞれの寝室に戻って夜を過ごす。

「それじゃあ、ロイド。始めようか」

「はい、ご主人様」

屋敷の一室にロイドと俺は二人。

「ロイド、いつもありがとうね」

「ご主人様、私が存在できるのはご主人様のおかげです」

「まあまあそんなことを言うもんじゃないよ。僕が王になれたのはロイドのおかげでもあるんだから」

「そんな……」

アンドロイドメイド「ロイド」は赤面を紅潮させる。

「ロイド、何かあったときはまた俺とペンシルとルームを助けてね」

「はいっ……」

桜柳は、ロイドの肩に手を伸ばす。するとロイドは桜柳にもたれかかる。

「それじゃあロイド……」

「はい……」

ロイドの目からは涙のようなものが流れる。

アンドロイドメイド「ロイド」の動力はガソリンである。ロイドは毎晩ガソリンを補給しなければならない。この世界にはガソリンを精製する技術など整っていない。したがってこのように毎晩ミツマタをガソリンにしてロイドに補給するのだ。

「よし、終わったよ、ロイド」

「いつも私のためにありがとうございます」

## 五感とメイド

——死にたくない、死にたくない……。

ルーフェルファは、異世界に転生され非望の死を多数遂げている。その原因は、桜柳の逆鱗を逆なでしたことが原因だ。

桜柳が飛ばした異世界は残酷で、ほとんどのすべての選択肢はほぼ必ず死ぬ、直結するようになっていてる。

——俺は、くっ、必ず、桜柳のところへ戻って見せる。

ベルファは、この異世界の残酷さから脱出することができれば桜柳にもう一度認めてもらえるだろうと思いい、必死であった。

離れていく四肢、ぼやけていく視界、あと流れ出る血潮。それらすべてがベルファを絶望に陥れさせる。

そして、ベルファは3643回目の死を迎えた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ご主人様、そろそろルーフェルファを異世界転生させて2か月くらいになりますね」

ベルファに辱めを受けさせられたペンシルは、書類を整理整頓をしながら思い出したように話した。

「ああ。あのゴミ野郎今頃どうしているかな。昔は結構いやつで彼女もいるほどのまともな奴だったんだ。でも、あの行為を許すことはできない」

思い出すと非常に憎しみを覚える。俺の使用人に人としてしてはならないことをしたのだ。そのような奴を許すことなど俺には到底できることはできない。

「いつでも、私の見方であるご主人様は素敵です」

ペンシルは俺の近くに来て、俺によりかかった。なので、俺はペンシルの髪をなでた。

「あの時は悪かったね。俺もあいつがあんなことをするとは思わなかったんだよ。本当に申し訳ない。もう一度たりとも絶対にあんな怖い思いはさせないよ」

するとペンシルは頬を赤らめて、

「私はご主人様にずっとついていきます。ご主人様に言われたことは絶対に従います。私が存在する理由は、桜柳様に絶対服従なんですから」

ペンシルの温度が高くなっているのを触覚で感じる。

「そうそう、ご主人様。本当にベルファアが死にまくっているか、今の段階でどうなってるかちよつと気になってるかもしれないです。実際に死ぬところを見てみたいものです」

なるほど。確かにベルファアが今どうなっているかちよつと気になるかもしれない。

「じゃあロイドに頼んでベルファアがいる世界にちよつと行ってみようか」

ペンシル「はい。あつ、そのつ、ご主人様も一緒に来てくだされますか?」

「もちろんだよ。ベルファアとお前を二人きりにさせることなんてもう一度もない」

あの人間の鏡にも置けない異常性癖者とペンシルを金輪際二人きりにさせることなんてできやしない。当然だとも。

「うっ、うれしいです。ご主人様と一緒に安心です。行きましょう。私はご主人様にずっとついていきます」

そして、俺とペンシルはベルファアが飛ばされた異世界の観測に行くことを決意した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ロイド、ルーム。僕はペンシルと一緒にベルファアのところへ見学しに行ってくるからお留守番をお願いしてもいいかな?」

この屋敷を空にすることはできないのでロイドとルームにはお留守番をしてもらおうように頼んだのであった。しかし、二人の表情は不満な表情をしていた。

「ごっつ、ご主人様がいなくなるってことですか……」

顔泣き出しそうにしてまるで、紙をくしゃくしゃにしたような顔をして今にも泣きだしそうなルーム。

すると即座に平常は冷静なロイドが恐ろしい形相の血相に切り変



えて、

「あの変態野郎のところへ行くなんて……ご主人様、もしかして私たちじゃ不満なんですか？」

いつもは冷静なロイドやルームがこういうタイプの反応をするとは驚いた。

「僕がここからいないということはありませんし、君たちに不満なんて一つもないよ。ロイドやルーム、ペンシルがいなくなるような生活なんて考えることもできない。3人そろっていないと僕の存在理由が霧散してしまう」

「ごっつ、ご主人さまあゝ」

ロイドとルームは口をそろえて言った。あと涙を浮かべて。

「でもご主人様、なぜペンシルと二人つきりなんですか？」

ルームは声を絞り出すような声で言った。

「いや、その、ペンシルがベルファが本当に痛い目が合わされているかを確認しに行きたいっていうんで……神算鬼謀はないよ」

ロイドとルームはジト目で俺のを見る。そういえば、こんな表情を見せたのは今回が初回だ。とてもかわいい。

……のだが、今回の状況はまずそうだ。

ロイド「私も、その、二人つきりでどこかに連れてつてくれますか？」

ルーム「わっ、私も」

ロイドとルームは声を揺らし揺らめきを感じるような震えるような声で言った。もしかして俺は、三人が三人を均等に見ていないと思われていた。しかし、俺はみんなをみんなと同じように平均的に見ているので、返答に困惑することは100%ありえることではない。

「もちろんだよ。三人が望むなら」

「私だけご主人様を独り占めするのはさすがに申し訳ないので、ルームとロイドもぜひ……」

ペンシルはロイドとルームに言った。

ペンシル&ロイド「ご主人様、絶対ですからね」

ロイドとペンシルは俺にくつつきながら言うのであった。  
するとルームは、俺に近づいた。そして、その距離はルームの甘い呼吸が聴覚で感じるような距離だった。あと、ルームの髪の毛の匂いを感じる。

「どうしたんだ、ルーム。いったい?」

するとルームは俺の口とルームの口との距離が0距離になるまで接近した。

ルームのキスの味を感じる。

「る、ルーム!?!」

「ごっ、ごめんなさい。ご主人様が一瞬でも離れるのが怖くて」

ルームの表情は真っ赤になっていてぬくもりが熱かった。

ペンシル&ロイド「る、ルーム!?!」

「ずっ、ずっ、ずるいですよルーム!ご主人様はみんなのものですのに」

ペンシルは言った。

「わっ、私も同じような考えを所持しています」

二人の精神が参り始めているのがよくわかった。なので、

「ロイド、ペンシル君もこっちにおいで」

「ご主人様、いいんですか?」

「僕はいつでも三人をなかよく均等に扱おうって言っただろう。つまりその……言わなくてもわかってくれるよね」

ロイドとペンシルは恥ずかしそうな顔をした。

「ご主人様、うれしいです!」

そして三人は桜柳に寄り添いあうのであった。

## 自転車とメイド

それからいろいろあったものの、ロイドの手を借り、俺とペンシルはベルファアがいる異世界へいくことが出来ることを可能にした。純白の真つ白な空と草原。平野上等といわんばかりの何も無い平野。凹凸のような凸凹など何一つありはしなかった。眼前に埋もれている地平線。いかにも人工的に作られたかのような何にも特徴がない平野だ。

「ご主人様、君が悪いですね。まるで出来損ないの安い3Dゲームの世界観みたいです。いや、どんなゲームでも真つ白な空に何も無い平原っていうのは見たこともないですよ」

ペンシルは、この平原の様子を的を射ており確かに表現した。異世界に3Dゲームがあることに驚いたかもしれない。しかし、俺がミツマタで以前の世界に存在したすべての家庭用ゲーム機とゲームソフトを作ったので、ペンシルはゲーム事情をよく知っているのだ。

「ベルファアを絶望の断崖絶壁に陥れようとしたからね。このような何にもなく不気味さだけが広がる世界にしたんだよ」

「さすがはご主人様です」

ペンシルは、俺の腕にペンシルの腕を絡ませ縛る。あと、メイド服で露わになった横胸を押し付ける。普段の屋敷ではペンシルはおとなしいので、このようなことはしなかったもので、どうして急にやってきたのかわからないので、不思議に感じた。まあこれは何というかちよつと感銘を受けさせられるのだが。

このように何も無い平原からベルファアを探すなんてことは、雪山の中に隠した塩バニラアイスを探すような難易度で、千里眼なんぞ持たない俺やベルファアにとって、それは修行でしかなく、どうしようもならないため、俺はミツマタで、ベルファアを探すための道具を作ろうと頭の中で考え始め、それを実行しようと考えしている。

「ペンシル、ベルファアを探すための道具をミツマタでつくろうと思うんだけど何かいいアイデアはないかな」

するとペンシルは息がかかるほどに近く顔を近づけて、

「そうですねえ……、ご主人様が作ってくださったゲームのモンスターを狩るゲームでは地図に敵があるかわかるようなものが表示されて便利なんですけど」

相手の位置を地図上に示すことができることができればそれはそれはとても便利だ……そうだ！ベルファを探すことに特化したリーダーをつくれば！

おれは上着の上半身の胸ポケットの財布の入った袋から財布取り出しそこから1万円札を取りだし、

「ベルファを探すためのリーダー！」

そう叫ぶと、1万円札から白い眩い光がはなたれ、白夜のような光り輝く白い光に包まれ、白い光がベルファを探すためのリーダーに変化した。

パラボラアンテナのようなものと、ブラウン管テレビのようなモニター。スイッチを入れると2時の方向にベルファがいることが示された。

「おっ、見えたぞペンシル！」

「さすがはご主人様です！」

「いや、今回はペンシルのおかげだよ」

するとペンシルは顔を赤くし、

「私の……おかげ……」

「そう、ペンシルのおかげ」

「ごっ、ご主人様あ……」

するとペンシルは、俺が抱き寄せられた。

ペンシルは非常に華奢であり、時たま小学生と間違えられるほどだ。抱いていてそのことがよくわかった。しかし、華奢でいるのにもかかわらず、柔らかく暖かい。

屋敷では寄りかかったりはするのだが、さすがに抱くのは初めてであった。

「そういうえば、ペンシル。屋敷ではあまりこのようなことはしないね」

「あ、ごめんなさい。嫌でしたか？」

ペンシルは不安げそうな目でこちらの目を見る。

「いや、まったくそんなことはないんだけど」

ペンシルは両肩と背中をなで下ろし、

「その……屋敷の中だとみんなの目がありますからなかなかこのよう  
なことはできなくて」

今まで気づかなかったが、三人のことをあまり満足感を満たされて  
いなかったようだ。三人いることから均等的に扱わなければいけな  
いことから、俺は特に何もしてこなかったのだが、このようにペンシ  
ルに切ない思いをさせていたのだ。

「ごめんね、切ない思いをさせてしまって。そういえば、ペンシルは  
こつちの世界にきて初めて出会った人だったんだよね。メイドに  
なったのも君が原初。現在までペンシルと話せなかった分、今この世  
界で話して、もつと仲は良く深めようね」

「ありがとうございます」

ペンシルは今回は初回だが、一番の微笑を見せてくれた。とてもか  
わいい。

「さて、ベルファがいる方向が分かったことだしとつとと向かってみ  
よう。徒歩で行くのもちよつとめんどくさいから、自転車で行くか」

「自転車?」

一万円札を自転車に変化を促しさせた。

「ご主人様、これはどうやって使用するんですか?」

「そうだね、僕が操作して動かさせるからペンシルはその後部座席に  
座ってちょうだい。」

「こうですか」

ペンシルは後ろの荷台にまたがる。

「そうそう! あっ、このままじゃ座り心地が良くないね。『座布団!』  
これを後部座席の下に敷くといいよ」

自転車をこぎ始めると、ペンシルは俺にギョツとしがみつくので  
あった。

「自転車に乗るのは初めてなんだよね。はじめは怖いかもしれないけ  
ど風が体をなでおろすのは気持ちいい感じだと思うぞ」

しかし、ペンシルにとって自転車が怖かったのか、ひよつとして違

うかもしれないが、応えることはなく、強く俺にしがみついているの  
であった。

## ルーフ・ベルファアの逆襲

しばらく自転車を操っているとベルファアが横たわっていたのが確認できた。

泥まみれでボロボロになった服装に、こけた頬。この世界での生活の状況の最悪さの一端の情報の見識することができる。

「ご主人様、ひどい姿ですねえ」

ベルファアの姿を見てペンシルは直情的な感情を漏らす。

「ああ。まさにこいつの状況を短かめに言つて『ひどい姿』だねえ。まあ、所謂当然の報いってやつかな」

俺とペンシルは見つめ合い、ベルファアを見てあざ笑う。  
すると、

「お、お前は、桜柳なのか？」

「ああ。お前の残念な姿をちよつと見てみたいと思つてね。よくもあの時はペンシルを……」

「あのときは、どうしようもなかったんだよ。変な世界に連れてこられて右も左もわからなくて」

ベルファアはあの時の状況の言い訳をしている。実にみじめだ。しかし、ペンシルは今にも泣きだしそうな、おびえている表情をしている。

「お前のくだらない言い訳なんぞ聞きたくない。お前はこの世界で永遠に苦しめ。苦しみ続けろ！」

「そうか、お前はもう俺を人として見ていないのか」

ベルファアは俺に向かって泣き言のようなことを言ってきた。

「ああ」

もちろん即答でこたえる。ベルファアなどもう人として見ていない。これからもそれは変わることはないだろう。

「俺はなあ。俺はなあ。お前のことがす……」

ベルファアはまた何か言おうとしたが、これ以上こいつに付き合うつもりはないので膝蹴りを一蹴したので、ベルファアはひっくり返ったので静かになった。

するとしばらくして、ベルファは立ち上がり、ペンスルの肩をつかんだ。

「お前これ以上この世界に俺をとどめさせるのならこいつがどうなるかわからないぞ」

「ご、ご主人様あ」

興奮してわけのわからないことを言うベルファ。そしてペンスルの涙が涙ぐんでいた。

「お前、ペンスルに触っていいとも思っているのか！」

怒りを抑えることができなかったので、ミツマタでピストルをつくった。

「ごっ、ご主人様！殺人はいけません。ご主人様の手がこんな奴にけがされるのは嫌ですよ」

ペンスルがこう言うのでピストルを射撃することはやめた。ペンスルが言うのだから仕方ない。

しかし、このままではペンスルが危ない。なので、ハワイで習った合気道の技をベルファにかけ、気絶させた。

「ご主人様あ。怖かったです」

ペンスルは俺に抱き着いた。そして、俺の服に目をゴシゴシと擦り付けた。

「怖い思いをさせてすまなかった」

「でもご主人様が殺人鬼にならなくてよかったです。私のあこがれのご主人様が殺人鬼になるのはいやですから」

「ありがとうございます」

ペンスルの思いを受け取った。

「それじゃあ、ベルファはここに固めておいて、帰るとしようか」  
するとペンスルは、俺の袖をつかみ、

「あの……もう少しここにいませんか？」

「どうして？」

「ご主人様と二人っきりで過ごせたのは列車の時以来ですのうれしくて」

「こういうことなので、この世界でペンスルともうちよつと過ごすこ



とにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ご主人様、私思っていることがあるんです」

ペンシルは草原の目の先にある地平線を見てつぶやいた。

「どうしたんだい？」

「ご主人様と初めてお会いしたとき、私が言ったことつって覚えています?」

機関車のドラフト音が響き渡る旧型客車でのことを思い出す。あの時のペンシルは鉄道会社でウエイトレスをしていた。小学生にも見えるほどのきゃしゃな体で重いワゴンを運んでいたペンシル。彼女の表情は今ほど豊かではなく、とてもつらそうに仕事をしているのを思い出した。

「ウエイトレスをされていて、俺がお金を払おうとしたときのことだよね。覚えているよ」

ペンシルはメイド服越しに胸をなでおろした。

「よかった……今のご主人様は、安定な生活、安定な生活基盤、安定な権力があります。初めてこちらの世界の住人の人になったときは、確かに無理がありました。が今のご主人様は、無敵です。ご主人様は、最強です。ご主人様は、無双です。ご主人様は、世界最強です。ご主人様は、最強の料理人でもあります。ご主人様は、最強スキルを持っています。ご主人様は、チートです。ご主人様は、私の救世主です。ご主人様は、賢者です。いいえ、ご主人様は、今までの小説の最強を表す言葉では表現できないほどのお方です。」

ペンシルは、必死になつて、真剣に、話している。そしてペンシルは、数秒の間を開けて、

「ご主人様。いいえ、桜柳様。私は桜柳様なしでは生きていけません。桜柳様は、私の人生を変えてくれました。ウエイトレスとしてしか生きていけないような私に生きる理由を教えてくださいました。ご主人様は、私の英雄です。こんなちっぽけな私ですが、もしよろしければあなたの、一生のパートナーに……」

ババババババババババババーン！

突然爆薬が破裂するような音が聞こえてきた。すると目の前が真っ赤になった。すると、目の前で話していたペンシルが、ぼたっと音を立って俺のほうに倒れた。

「ご主人様！早く逃げて！私のことはここに捨てて……ルームと、口イドのところ早く！」

ペンシルから流れる鮮血の生暖かさを感じる。でもペンシルを捨てることなどできない。ペンシルは俺に……。

「ペンシル、そんなことを言わないでくれ！俺は今まで何とかしてきただろう。お前を見捨てることなんて絶対にしない！」

「ふっ、格好の割ることをいつまでもべらべらと話せるもんだな」

するとさつき蹴っ飛ばしたはずのルーフ・ベルファアの姿があった。なぜか機関銃を持っている。

「お前がさつき一万円札をピストルにかえているのを見てわかったんだ。一万円札があれば何にでも変えられるってね」

ベルファアは一万円札をひらひらさせながら話す。

「アルフレートさん。この人ですよ」

「ああ。こいつで間違えない。俺の屋敷を奪い、俺をこの地へぶち込んだやつはこいつだ」

あのとぎの王がなぜかベルファアと一緒にいた。

「俺はお前がしたことの話聞いて絶望したよ。絶望のがけつぷちに立たされた。まさかお前が異世界の王様になって権威を振り回しているとはな」

ベルファアは蔑んだような表情で俺を見る。

「そういうやつは死んだほうがいいんだよ」

するとベルファアは機関銃で俺の心臓を貫いた。

そして、草原の池の藻屑になった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

機関車のドラフト音が鳴り響く。

隣には、ペンシルがいる。どういうことだろうか。

「ペンシル、ペンシル、大丈夫か？」

「ご、ご主人様！よかった……。ここはどこです？」  
「わからない。以前俺が乗っていた旧型客車によく似ているが」  
「うそ……」

ペンシルの表情は青ざめた。

## ゼロからの再出発

レールのつなぎ目のガタゴトとした音のリズムが一定で僕とペンシルの間の空気に不気味さを与える。

「なあペンシル、この列車ってどういう人が乗る列車なんだ？」

「死んだ人が異世界へ転生するための列車です」

ペンシルは暗い表情で言った。

「そういうことか」

窓の外の車窓を見てみると、そこは真つ黒い世界が広がっている。ロイドが作るダークマターを思い出すような黒さだ。

先ほどブルー・ベルファに射殺されて殺害された俺とペンシルが同じ列車に乗れたことが不幸中の幸いなのだろうか。一人でも知っている人がいて安心だ。

「俺たちはどこに連れて行かれるんだろう」

すると、車掌がやってきた。帽子を深くかぶっていて表情がよく見えない。非常に暗い雰囲気をしている車掌だ。

「切符を拝見いたします」

切符だ?!俺はこの列車に乗るために乗車券の類を買った覚えはない。

「切符を拝見」

車掌がしつこく迫るので、いつも電車に乗るときには、ワイシャツの胸ポケットに切符を入れていたのでそこに手をつ突っ込んだ。すると、そこには硬い感触。昔の硬券と呼ばれる切符が2枚入っていたので車掌に差し出した。

「確認いたしました」

切符には理解不能な文字が並んでいたのを読めなかったが、この列車の切符を持っているようなので、車掌は入缺してくれた。

「ご乗車ありがとうございます。到着までもうしばらくかかりますがごゆっくり」

車掌はそう言い残して俺たちが乗っている客車をさっさといった。

「ペンシル、これなんてかいてあるかわかるか？」

「これは……元居た世界に行ける切符ですね。ただし、時空平面が以前と違っています。以前よりも前の時空平面に行くきつぷになつています」

ペンスルの発言には時空平面という言葉があつたが、一発で理解することは当然でできなかった。

「時空平面？」

「私たちが以前いた時空平面A839634番でした。私たちがこれから連れて行かれる時空平面はA364114番です。まだご主人様がこつちの世界に転移する前の時空平面です。以前私たちがいたA839634番から私たちの存在はなかったことにされ、私たちはA364114番の住民になります」

ペンスルはメモ用紙と万年筆を取りだし図を書いて説明した。

斜めの線を2本書き、上の線から下の線に移動したということを説明した。

つまり、依然過ごしていた時空平面と、これから行くことになる時空平面に連続性がないので、ゼロからやり直しになるということらしい。

「A364364番のルームとロイドはどうなるんだ？」

「それはわかりかねますが。そうですね、私とご主人様の存在はなかったことにされています」

「そうか」

「ただ、A364114番にもルームはいます。ちやうど、最初にルームと出会ったときのルームに会うことができます」

「なるほど」

列車は徐々にスピードを落とし、駅に到着した。以前ここへ来た時と様子はほとんど、いや何一つ変わっていない。そのまま過去の世界にきたということらしい。

ペンスルとともに改札を抜け街に出た。

石畳の道路にレンガ造りの建物。何もかもが以前と変わらない。その辺を歩いている人もどうも貧しそうな雰囲気が漂っているので、あの王がまだ支配しているのだろう。ああ忌々しい。忌々しい。

「ペンシル、ルームを探すか？」

「そうですね」

俺の記憶が正しければ、裏路地にルームはうずくまっただ。俺の記憶が正しければ、裏路地にルームはうずくまっただ。

薄汚い裏路地を探すこと30分。ようやく、それらしい人が見つかった。紫髪で、ぼろぼろの布切れのようなみすぼらしい服を着て、裸足で、ざつくばらんに切れた紫髪の長髪の少女に声をかけた。

「きみはルームかい？」

すると少女は丸い目をさらに丸くして驚きを隠せないような表情をした。

「なぜ私のことを知っているんですか？　もしかしてあの雇い主の手下ですか？　私はもうあんなところで働きたくないんです？」

「僕はあるの暴力が趣味の雇い主とは全く関係ないよ。君を未来から助けにきたんだ」

「未来？」

「まあそのうち理解するさ。あ、ちよつと待つてね」

ポケットから一万円札を取りだし、ルームの姿を戻した。

「なっ？　なにするんですか？」

「ほら、鏡だ。これで見てください」

恐る恐るルームは鏡を見た。

「うっ、うっ、私がこの姿に戻ることができなんて……実は私、5年くらい前に両親を亡くし、街をさまよって新しい仕事を見つけたのですが、運悪くその雇い主は暴力を趣味とする人で、私のことを暴行しつづけ、このような姿になってしまったのです。まちがえなく、5年前の私の姿です」

感動のせいか、ルームは涙を流していた。

「俺はこのセリフを以前に君から聞いたよ。全く同じセリフをね。君との思い出を君に復元できるといいんだけど」

もう屋敷での記憶も、車をつくってドライブした記憶も、王を倒した記憶もはやルームの記憶からはなくなっている。いや、もともと存在しなくなっているのだ。

「ご主人様、ミツマタって記憶は操作できないのでしょうか？」  
「ペンシル！その手があったか！さすがはペンシルだ。君は天才だよ」

そう言ってペンシルの頭をなでると、顔を赤くし、

「ご主人様ほどではありませんよ」

といった。

そして俺はミツマタで記憶をインプットするための機械を作り上げ、以前のルームと記憶を同期させた。

するとルームは、

「ごっ、ごっ、ご主人様あー。私とても寂しかったです。どうでしたか？ ルーフ・ベルファアは？ それとここは……まさかご主人様！」

「そう、俺とペンシルはルーフ・ベルファアに殺されて過去に飛ばされてしまったんだ。すべては俺の不注意でね……」

「そんな……ご主人様！ 逆襲しましょうよ！ こんな仕打ちはひどすぎますー！」

「ご主人様、私も同感です。ルーフ・ベルファアは全く反省していませんよ」

「ああ。絶対にあいつを懲らしめてやる」

そして、ベルファアを始末することを決心したのであった。

## 王の隠れ家

「ご主人様、これから先私たちはどうしたらいいでしょう」

ルームは不安げな表情で言った。

「そうだねえ。とりあえずルーフ・ベルファを何とかしようと思うんだけど、あいつはいつごろこっちの世界に来るのだろうか」

「ええーっと、ペンシルがベルファのところへ行つたのがご主人様と私が出会つて半年くらいのことですよね」

物覚えの良いルームは答えた。とても頼りになる存在だ。

「じゃあこの半年間で基礎固めをしなければいけないな」

ベルファを破壊するための準備期間はおよそ半年。その間にできることを考えなければならぬ。やれやれ、ベルファを殺ることくらい簡単なことだとは思うが準備に躊躇せず木端微塵にぶっ飛ばして、微粒子レベルで存在を消し去らなければいけない。

前回は王の立場を奪い取つたのであるがなんだかルーフは王と異世界で仲良くしまったので、俺が殺されたことになつていたので、王になることは控えることにしたので、新しく俺とペンシルとルーム、あとロイドのすみかをつくらなければならない。あ、ロイドをつくるのを忘れていたのでミツマタで記憶とロイドを作成した。

「ご、ご主人様ー。まさかこんなことになつてしまつたとは。やはりあの時私はベルファを殺害しておくべきでした」

ルームはあの時のことを後悔していらしい。しかし、俺が屋敷に連れてこいといったので殺さなかつたのも無理ない。ロイドは全く無罪放免の濡れ衣なのだ。

「いや、君の手をベルファになんかに穢されるわけにはいかないよ」

「ご、ご主人様……」

ロイドは俺の腕に纏わりついた。

「ご主人様、早く住処をつくりましょう」

車を20分ほど走らせてみると、前回と同じように、草原、森、砂漠が広がっている。王都に住むのも考えたのだが、王の周りにいるのは危ないと思つたので森に住むことにした。



「なああペンシル、この森にある山だけどその山の地質ってどうなってるんだ？」

「そうですねえ、この辺は石が採れる山ですからとても硬くなっていますね」

石が採れる山。つまり地下壕をつくりやすい山だということだ。

「昔ここは王都で使う石を採掘するための山だったんですよ。でも今はあまり需要がなくなってしまうって廃墟と一人か二人くらいの住民しか住んでいません」

そういえばベルファがここに来た時にここの住民を一人殺害していた気がする。なんてやつだベルファは！鍛えてやる！

「ご主人様、ここに私たちの家をつくりましょう」

ロイドとペンシルとルームは寸分狂わず一度に言った。

切通から山の中の採石場に入ることができたので、三人で入ることにしたが中は真っ暗闇であったので懐中電灯をつくり手元を明るくした。

「ご主人様の発想はやはりすごいです！火を使わずに明るさを作り出すなんて！」

ルームは目を輝かせていった。

懐中電灯もこちらの世界では珍しいものであった。まあこの世界では電気を使っているところを見たことがなかった。屋敷でも自分で発電機をつくってガソリンで電気をつくっていたくらいだ。やれやれ、なんでい世界って思い描いたように文明が遅れているのであるうか。

「ご主人様―寒いです……」

肌の露出度が多いメイド服をきたペンシルはとても寒そうにしていた。メイド服ではない服をつくることを提案したが、なぜか三人は頑なに拒否し続けた。

「このメイド服はご主人様との思い出がたくさん詰まっていますし、その……」

ペンシルは「その……」といったものの顔を赤くしてそこから先を言ってくれやしなかった。



## 告白

ロイドはガソリンで動いているアンドロイドだ。自らエネルギーを作り上げる機構は持っていないロイドにとって俺はなくてはならない存在だ。ミツマタをつかってガソリンをつくりそれをロイドに補給させる。毎日このようにロイドは俺のところに来て、生きるための糧を補給しているのだ。

「ごめんねロイド。もうこんなに間を空かせるようなことはしないよ。こっちへおいで」

するとロイドは俺の膝の上にもたれかかった。

呼吸の頻度が多くいかにも苦しそうにしている。

「ご主人様がいてくださるおかげで私は生きていけます。こんな私をいつも見捨てないでいてくれて、ありがとうございます」

ロイドは赤面して言うのであった。

ミツマタを石油にかえてそれをロイドに補給する。

「君はルーフ・ベルファを消す際に最前線で戦うことになるかもしれない。でも俺はお前を傷つけたりはしないよ」

するとロイドは、

「どんな出来事があってもそれを乗り越えられるご主人様を私は信じています。なので、私はご主人様の味方です。ずっとです。」

俺はロイドの緑の髪をなでるのであった。

するとペンシルがドアを開けて部屋に入ってきた。

「ご主人様、私……寂しくて」

ペンシルは、目をうるわし、頬を赤く染めて言った。

「今晚はご主人様と一緒に……いたいです……」

そう、ペンシルは死ぬ間際に俺に言った。俺のことが好きだと。

「ペンシル……」

「私はご主人様と結婚したいのです」

するとペンシルは、椅子に座る俺の前に回り込み、頬に両手を添え

て、唇をあわせた。

「ペツ、ペンシル」

今起きている状況を理解するのに数十秒かかった。

俺はペンシルにキスをされているらしい。

唇に感じる暖かい感触は新鮮で、いままでに感じたことがないぬくもりであった。

「ご主人様、私はご主人様と結婚したいです」

「ペ、ペンシル！そしたら私は……」

一応ロイドはメイドでもある。ペンシルと俺が結婚したら三人の間柄に亀裂が入ってしまう可能性がある。だからか、ロイドは非常に焦りを覚えていた。

「もちろん、私一人がご主人様を独り占めするのなんて、できません。ご主人様のような素晴らしい方を独り占めにすることは、私には役不足です。」

ペンシルは笑顔で言った。

「ルーム、入ってきていいよ」

するとルームは恐る恐る部屋に入り、泣きそうな顔……と表現すればよいのかどうかよくわからないがそのような顔で、

「ごっ、ご主人様、私もご主人様と結婚したいです」

ルームは、のどから声を絞り出すような声で言った。

「私もご主人様がいなければこのような生活はできずに、一生奴隷のような生活をしていました。ご主人様のおかげで私は自分の存在理由がわかりました。私はご主人様に一生ついていきたいです」

「そ、そんな……俺なんか……」

俺は俺自身がそのように言われていいのだろうかと疑問に思った。

いままでは、このように結婚してくれとか、俺がいないと存在理由がわからなかったとかを言われたことはなかったもので、正直とてもうれしかった。

結婚……ペンシルに列車で言われたときから遠ざけていた言葉の一つであったのだ。

そうこう考えていると、ロイドが、

「私はアンドロイドです……私に結婚という概念が存在したらその……私も結婚したいです」

ロイドも立派な人間だ。その辺の人間よりも人間味がある。そう  
だ、俺はそうするしかない。

「ペンシル、ルーム、そしてロイド。僕と結婚して一生一緒に暮らそう」

そして三人は俺のお嫁さんになることになった。

## 披露宴。パーティー

結婚して初めての夜が明けた。結婚といっても結婚したいですと言つてOKをしただけなので正式な結婚とは言えないだろう。昔の、この国の結婚の作法がわからないので、ペンシルに聞いてみることにした。

「結婚した相手と杯を交わします。とりあえずは」

ということなので、ロイド、ペンシル、ルームと杯を交わすことになつた。

その杯の味は、複雑な味がした。

\*\*\*\*\*

「みんな、今日はパーティーを開こう。おいしい料理を作つて一生の思い出に残る思い出にしよう！」

するとルームは、

「ご主人様、よかつたら3人で協力して料理を作りませんか？」

続けてペンシルが、

「ご主人様との思い出で記憶に残らないものは何一つ存在しません。パーティーは楽しそうです！」

「よし、じゃあ七面鳥の照り焼きと、ケーキ、ステーキ、ピザ、サラダといったところかな。ほかに何か提案はある？」

「ケーキ？ピザ？……なんですかそれは？」

「あれ？今まで作つたことないから知らないか。よし、とてもおいしいから、作つてあげるよ」

「いつもの料理がとてもおいしいのに。もっとおいしい料理を作るなんてさすがですご主人様！」

という調子で、パーティーの準備は始まつた。

金庫から一万円札を取り出し、今回のパーティーに必要な材料を作り出す。

「七面鳥、醤油、和風ソース、牛肉、小麦粉、卵、砂糖、チョコレート、トマト、ピーマン、ベーコン、レタス、コーンつと……とりあえずこ

れだけあれば作れるかな」

次々と一万円札が料理の材料に代わるのを見て、ペンシルとロイドとルームは目を丸くさせる。

「ご主人様あ、この材料をどう料理するんですか？」

ルームは好奇心を持った子供のように俺に尋ねた。

「まあちよつと待つてな」

俺は昨日ミツマタで作った電子レンジとガスオーブン、ガスストーブを使い先ほどのメニューを完成させた。

「すごいです！ご主人様。こんな料理見たことがありません。見ているだけでも楽しいです」

ロイドと、ペンシルとルームは驚いた表情で目をキラキラと輝かせた。

「でもちよつとこれだけじゃ足りないな」

「そうだ！」

「プリンを作ろう！」

「プリン？ なんですかそれ」

ペンシルは不思議そうに聞いてくるのであった。

「作ってみるね……あ、作り方がわからないのと料理が覚めてはいけないからミツマタで作ることにするよ」

そして俺は、ミツマタで、ホイップクリームがのったプリンを作った。

「見たこともない物体ですね」

ロイドは不思議そうに見つめる。

「とてもおいしいよ」

すると三人はプリンを一口ほおぶるのであった。

「すごいです！ ご主人様！ 普段の料理でさすらおいしくて仕方ありませんのに。こんなに甘くて、濃厚で、おいしい食べ物初めて食べました」

ペンシルはプリンを食べながら幸せそうに感想を述べた。

「ごっつ、ご主人しゃまあー。おいしすぎて、ほっぺがおっこちてしま

「しょうでおいしいです」

ルームがキヤラ崩壊、もとい、おいしさのあまり感情を正常に保てずにいる。確かにこっちの世界の料理は、あまり優れているものではなかった。

結婚のパーティーは盛大に行い、疲れ果ててその場に寝落ちしてしまふのであった。



## 殺意

ついにこの日が来た。

太陽がきらきらとひかり、俺の皮膚を焼き焦がす勢いが熱い。

今日は異世界からの列車が到着する日だ。

そう、ついに待ち望んでいた日が訪れたのだ。

永遠の天敵。「ルーフ・ベルファ」がこっちの世界に尋れてくるのだ。

奴に殺されて、過去の世界に戻った俺はルーフ・ベルファが初めてこちらの世界に訪れるよりも前の時間に来たことになっている。だから、ルーフ・ベルファは、本日この世界に初めて訪れるということになるのだ。

ペンシルに辱めを受けさせて、俺とペンシルを殺害した。奴は許される余地など微塵たりとも存在しないのだ。

「ご主人様、ルーフ・ベルファの件。どうします?」

ペンシルは真剣なまなざしをした目で俺に尋ねる。

ルーフ・ベルファ、忌々しさの象徴のような人には、屈辱感のシンボリックな苦しみを味合わせていただきたい。

「よし、こうしよう」

ホワイトボードとマーカーを用意して、ペンシルとルームあとロイドに作戦を伝える。

まず、列車が到着してすぐに、ロイドの必殺技、「シユバルツ・ダークマター」を発動させる。ちなみに、シユバルツ・ダークマターとは、周りの時空を止めることで、攻撃対象以外の動きと時間を止めることができる、ご都合主義的な結界のようなものだ。

さて、「シユバルツ・ダークマター」を発動させたのちは、ベルファをこん睡させる。

そして、この要塞に連れ込み、3Dプロジェクターを使い、列車の中を再現する。

そして、ペンシルを再現したものを用意する。

当然ルーフ・ベルファは欲望に駆られてペンシルに手を出すだろ

う。

そこで俺が、ベルファにとどめを刺す。  
完璧だ。

ということを、三人に伝えた。

すると三人は、

「「すごいです！ご主人様。この計画でしたら完璧にルーフ・ベルファを消し去ることが可能ですね」」

三人は驚いたものを見たような表情で俺を見て驚いた。

\*\*\*\*\*

計画を伝えることができたので、4人でルーフ・ベルファが到着する駅へ向かった。

相変わらず、駅前には死んだような空気が漂っているので、人々の希望に満たされない表情は何度見ても心のどこかに息苦しい感情を覚える。

「ご主人様、やっぱりご主人様が王にならないとこの世界はダメなままですよ」

ルームは上目遣いの目で俺を見た。

後を続けてロイドが、

「ご主人様、ルーフ・ベルファを始末し終わったら王になりましたよね。ぜったいなんですからね」

「ああ、絶対そうしてやる」

俺の将来の身分は王になりたいと心から決心したのであった。

そうこうしているうちに、プラットフォームに列車が到着した。

車掌が扉を開けてすぐに、ロイドはシュバルツ・ダークマターを発動させた。

「よくやったロイドー」

そういつて彼女の頭をなでると、なぜだか彼女の顔が赤くなった。

さて、周りの時間を止めたので、驚きふためいているルーフ・ベルファが列車からあほみたいな面をして出てきた。

「この世界はどうなっているんだ？」

相変わらずの、あほみたいな日本語不自由でいうルーフ・ベルファ。寸分の隙間もないほど短時間の間に、ロイドはルーフ・ベルファを気絶させた。

そして、ルーフ・ベルファを屋敷にもっていった。

作戦通り列車の車内を再現する。

「起きろベルファ。いつまで寝ているんだ」

！ベルファに声をかけると、ベルファは飛び起きた。

「???ここはどうなっているんだ。てか、お前は咲蘭か？」

「ああ」

俺は冷たく答える。

「桜柳、俺を列車でここまで連れてきて何をするつもりなんだ？個人的に旧型客車に乗れたことはうれしかったんだけどさ。まあ、こんな宇宙の果てに来ちゃったよ。やれやれ、お前は何を考えているのかさっぱりわからん」

ベルファはよくわからないことを言っている。やはり頭がくるっっている奴だ。

狂っている奴には、この状況を説明しなければならぬ。

「思い出とは無価値なモノ、しかし、その在り方はいかようにも変化する。ここは君の精神世界。故に明白。君はいないはずの『彼女』をカンパネルラに当て嵌めている。これは君の思考、そうありたいと思っただ一つの理想。まあ、『彼女』の生存に関して、君の理想とズレはあるかもしれないがね。」

今の状況を説明した。しかし、そのまま自分の姿でいうのは少しつまらないと思っただので、こいつの数学の教師にだんだんと姿を変えていった。

「お前は数学のじいさん……」

「まあ君にはそう見えるのだろうか」

「まあ忘れるはずはないさ、お前の特徴的な髪形は忘れられない。そんなことはさておき間もなく終点って言ってからなんで15分以上も走り続けているんだ？」

「相変わらず口のきき方がなっていないな、君は。言ったはずだろう、ここは君の精神世界だと。まあこれ以上君にヒントを与えるつもりはない。せいぜい頑張りたまえ」

「なるほど」

ルーフ・ベルファアは、俺のほうをみて納得したような表情をしている。まんまと罠に引っかかっているのが実に面白い。

「どうやら理解したようだな。さすが、私の見込んだ男だ」

「……つまりはこういうことだろ——」

そう言いかけたベルファアに俺は隠し持っていた麻醉銃をベルファアに打ち込んだ。

\*\*\*\*\*

そして、3Dプロジェクターの設定を、俺とベルファアでよく訪れていた公園へ設定した。

そして、睡眠薬の効果が切れたのでベルファアは目が覚めた。

この公園の風景を見て彼は、

「懐かしいな……。なあ、いるんだろう。咲蘭」

と、寝ぼけたことを言っている。

そこで、作戦通りペンシルを登場させる。

「なあ、咲蘭」

ペンシルは、迫真に迫る名演技でベルファアに話しかける。

その姿の迫力は、ぶったまげるものであった。

動揺したベルファアは、

「ちよつとまって、ちよつとまって、俺は桜柳でも咲蘭でもないぞ。中学のころから小説を書くことを趣味としていて、LINEグループで小説を投稿しあったりしていたかつ、数学もできる天才ルーフ・ベル

ファだぞ。なんだって俺が桜蘭なんて呼ばれないといけないんだ。もう俺は頭がおかしくなってしまう。簡単じゃねえよ。平常心を保つの」

と、わけのわからないことを言っている。すると、ベルファは続けて、何かを理解したような口調で言った。

「ああ、なんだよ、そういう事かよこんな事にも気がつかなかったのかよ俺はよ！ああ、分かっているさ。数学のじいさんは言っていた。思いつきは無価値でも、精神世界ならその在り方は変化する。ならこの少女は無視すべきだ。今、この瞬間、俺が向き合うべき相手は——っ！！」

中二病患者のような意味不明なことを発言しているのでペンシルは、

「あのー無視しないでいただきたいのですが」

と、キスでもできそうな距離まで近づいて言った。

そして続けて、

「何ボーツとしてるんですか、こんなところにいたら流れ弾が当たりますよ。ここは、自衛隊も警察も何にもない危険なところなんです。ボケーっとしていたら危ないです」

ベルファを惑わす甘い声で演技をするペンシル。すると、ベルファは、ホイホイと食いついてきた。

「俺に流れ弾が当たることを心配してくれてるのかい？ただ、俺にはその優しさを受け取る資格はないんだ……なぜならね……」

と、変なところで発言を止めたのち、

「俺は、桜柳がすきだから。」

などと、常軌が狂った発言をした。

……のであったが、

「べ、べつに、一人じゃなくてもいいよなあ。うんそうだとも。好きな人は何人いたっていいじゃないか。そうだよそうだよ。」

などといった。

前回は、このタイミングでペンシルに手を出したので、ペンシルにはここでベルファをぶんなぐっていただく。

するとベルファは気絶した。

なので、俺はこいつを始末することにするので、3Dプロジェクトの部屋へ侵入する。

ここまでは計画通りだった。そう、ここまでは。

## ルーフ・ベルファアの終演

「ご主人様、ごめんなさい」

ペンシルは最後にこのようなことを言った気がする。

俺が3Dプロジェクターの部屋に入ってペンシルに「ありがとう」と言おうとした瞬間であった。俺の体は金縛りにあったように動かなくなったのであった。

「ごごごごごごごごご主人様あん！」

外で見ていたルームは泣き叫びながらこの部屋に入り込んだ。

「ご主人様、何やってんですか。まだ作戦は途中じゃないですか」

「ルーム、ここから離れて。私は上からの命令を処理しなければなりません」

ペンシルは無表情で言った。

「そんな、ペンシル！今まで怪しいとは思ってたけどご主人様をこんな目にあわせるなんて」

普段物静かなルームがここまで叫ぶことは珍しい。

そしてルームはペンシルの胸倉をつかもうとした。するとペンシルは魔法でルームを突き飛ばして壁にたたきつけた。

「抵抗しても無駄です。私はあなたを傷つけるつもりはありません。桜柳を処理するだけですから」

「そんな、ペンシル。私と、ご主人様と、ロイドとの今までの楽しい思い出は全部演技だっていうんですか？」

「そのとおりです」

情熱的なルームの発言にペンシルは冷たく投げ返す。

「ペンシル。ご主人様はね、ペンシルのことを三人の中で一番愛しているってことわからなかったんですか？」

「それはそうなるように仕向けましたから」

「でも、あそこまで積極的なこと演技じゃできないじゃないですか。そのようなことくらい私にだってわかりますよ」

「演技は演技です。私が演技と言っているのだから演技です」

「そんな……いままでの思い出で楽しいとか思ったことはなかったん

ですか？」

目に涙を浮かべてつぶけた、

「私はとても楽しかったですよ。どうしようもなかったご主人様に拾われて、ペンシルの提案で私は今の生活をする事ができるようになりました。ロイドと、ペンシルとご主人様とたくさんのかんことをしました。ミツママで作った自動車に乗ってドライブしたり。あの独裁者を押しつけて王になったり。ミツママで作ったご主人様のビデオゲームはもう面白くて時間を忘れるほどの熱中をしました。4人で対戦したあのゲームの楽しさは今でも忘れられません。あと、4人で作った料理。あの味は今でも覚えています。毎日が新鮮で4人で暮らした日々……ペンシルは何にも感じなかったんですか？」

「……」

ペンシルは沈黙した。

「でも、私は命令を処理しなければならぬんです。それはどうしようもないことなんですよ」

今まで無表情だったペンシルは涙をこぼした。

「だったらどうして」

ルームは言った。

「私は上からの命令を聞かなければいけない。いわば人間ロボットなんです。反論する権利なんてありません。反発した瞬間に私の存在はなかったことにされます。つまり消されるってことです」

「みんな、もうよしてくれ」

俺はミツママで護身用に万能なる「魔除け」を作っていたので、金縛りを解くことができた。

「喧嘩は、しないでくれ」

「ご主人様！」

ルームは言った。

「ご、ご主人様、なんで私の魔法が」

「ペンシル、ルーム……あとロイド。俺を誰だと思ってる。おれは、桜柳桜蘭だ。俺にできないことなんてない。このミツママがある限り。」



だからよお、俺のまえでどうしようもないなんていうな。そして、涙なんて流さないでくれ。俺たちは4人で一つだ。誰がかけてもだめだ。だからよう、進み続けないといけないんだ。」

「ご主人様、でもわたしは」

「俺は君が好きだよ。ペンシル。もちろん、ロイドもルームも」

「ペンシルがあの時言ってくれたこと。本当にうれしかったんだ」

「ご主人様」

ペンシルは複雑な表情で答えた。

「確かにペンシルと俺との出会いは非常に不自然であった。まず、見ず知らずの人に結婚しようだなんて普通は言わない。それに、結婚ができればメイドになってくれだなんて」

今まで黙っていたことをここで言った。

「最初は少し疑っていた。でも、ペンシルは最初は演技をしていたけど、だんだんそれがそう感じなくなってきたんだ」

「そ、そんな」

「ペンシル、もう上の命令に従う必要なんてない」

「で、でも」

「お前の言うその上の人の存在は今消えてなくなろうとしているんだから」

「そうだろー！」

俺は、ボックスシートで気絶しているルーフ・ベルファの頬を引つ叩きながら言った。

「う、うそー！」

ルームは顔が青ざめた。

「ロイド！いまだー！」

「承知しました！ベーシック・インプット・アウトプット・システム起動、バトルオペレーターティングシステム(ターミネーターモード)、空間制御ドライバー、読み込み完了。シユバルツ・ダークマター!!目の前の男『ルーフ・ベルファ』を敵性と判定。」

ロイドが叫んだその瞬間周囲は真っ黒な暗黒な漆黒に包まれたのち、ルーフ・ベルファが砂場に変化した。そしてその砂が次第に細か

くなり、存在すらも見えなくなった。

「シユバルツ・ダークマター解除。ご主人様、ルーフ・ベルファをすべての時空平面状から消去しました」

「そ、そんな。今までそんなこと不可能だといわれてきたのに」

「俺は洞察力にも優れた桜柳だ。不可能なんてないし周りで何が起きているかもすぐに判断ができる」

「さすがはご主人様です。」

ルームは今までで一番うれしそうな表情をした。

「ご主人様、今まで騙してきて本当に申し訳ございません。」

ペンシルは涙をこぼしながら言った。

「ペンシル、涙なんて流さないでくれ。君もつらかったんだろう。わかっているって」

「ご、ご主人さまああああ」

ペンシルは泣きながら俺の胸に抱き着いてきた。

天敵であるルーフ・ベルファを処分することに成功したのちは目標はもはや一つしかない。

## 前日の夜の悪夢

それは、ルーフ・ベルファを始末する前日の夜のことであった。

「ご主人様、入室してもよろしいですか？」

ロイドはいつも通り俺の部屋に来た。

「どうぞ」

大理石でできた扉を開け、ロイドは俺のひざに座った。

「ロイド、明日のことなんだけどね」

「どうしました？」

「ペンシルのことなんだが何か思うふしはあるかい？」

ロイドは、顔の表情を険しくした。

「やはり何か思うことがあるんだね」

「まあ、ないと言ったらうそになります」

「この時空平面に来る前、俺はルーフ・ベルファに殺された。その時のペンシルの行動に少し違和感を感じたんだ。」

「といますと?」

「やたらとあの空間から出ることを引き延ばそうとしていき。まるで俺がルーフ・ベルファに殺されることを知っているかのように」

「そ、そんなことがあつたんですか」

「まあ、あくまでもこれは俺の憶測に過ぎないんだけど。ちよつとあまりにも出来すぎていると思つてね」

「でも、ペンシルのきな臭さは最初よりはずいぶんマシになってますよ。最初はとてもぎこちない感じでご主人様と接していたのですが最近違います」

「それは俺も思っていたところだよ。ペンシルはたぶんルーフ・ベルファに雇われている。でもそれはやりたくてやっていることではない。だからロイド。君の手を貸してくれないか。ペンシルを救いたいんだ」

「ご主人様の言うことならなんでも従います。それが私の生きがいですから」

「ありがとうロイド。じゃあ今日のお約束を始めようか」

ロイドの髪をなで、目にかかるほどの髪をよけた。  
そしてロイドにガソリンを注ぎ込む。

ロイドの表情は艶っぽい表情をしていてそれはまるでこの世のすべての美を具現化したようなものであった。

「ロイド、明日はシュバルツ・ダークマターを発動してほしい。そしてルーフ・ベルファを処分する」

「ご主人様、私はご主人様の味方です。絶対に裏切ることはありません。私をご主人様の駒としてご自由に使用ください」

「俺は、君を使い捨てるの駒だとは思ってないよ。ロイド。君がいないと生きる理由をなくしてしまう」

「ご主人様……」

ロイドの頬は紅潮していた。そして涙を浮かべていた。

だから、俺はロイドの唇にそっと口づけをした。

「ご主人様、いけませんよ。ほかのみんなに怒られてしまいます」

「僕はあくまでもみんなを平等に扱うよ」

「さすがは私のご主人様です」

ちょうどそのころペンシルは、自室で涙を流しているのであった。しかし、それを知るものは今の時点ではだれもいなかった。

## アンドロイドメイドは桜柳咲蘭の夢を見るか

わたくし、桜柳咲蘭のメイド兼お嫁さんのロイドと申します。

ご主人様の手により作られました、アンドロイドです。主に非常時の事態の時の戦闘の際のご主人様の身の安全をお守りのが私の役目です。

人間ではないため「アンドロイド」。いわば人造人間である私を人間のように愛情を持ってくださっているご主人様は、とてつもなく素晴らしいお方です。私は桜柳様を尊敬すると同時期に寵愛して愛しています。

そんな私と、桜柳様とペンシルとルームの日常を話していきます。

さて、私のご主人様の敷地内の屋敷での楽しい日々の始まりはたいてい次の文の言葉でスタートします。

「ルームさん、朝になりましたよ。ご主人様のお食事の用意をする時間です」

私たちメイドの部屋は個別に一人一人の部屋が与えられていて、廊下から向かってレフト側がペンシル、センターがルーム、右側が私の部屋です。私は朝になると、料理の腕が得意なルームを起こしにルームの部屋に行き、ルームを起こしに行きます。

「あ、ほあー。あつ、おはようございます。ロイドさん」

ルームは目覚めがあまりよくないので、いつも朝は早いので、寝ぼけているので、そう感じます。

「今日の朝ご飯は何にしましょう?」

「ええーと、新鮮な鶏のそのおー、鶏卵が手に入ったのでスクランブルエッグか目玉焼きにしようかなと」

ご主人様は、ミツマタで食材や料理を出すことができますがそれだと味気が感じられないということなので私たちが料理を作っています。

「それじゃあ今日はスクランブルエッグとウインナーと黒パンがいい

ですね」

スクランブルエッグとウインナーをフライパン使って料理します。あとガスコンロを使って。この画期的で万能的かつ利便性な調理器具、フライパンとガスコンロはご主人様がミツマタで作ったもので、私たちの朝の料理をとても簡易で簡単にしてくれました。さすがはご主人様です。

「あつ、おつ、遅れてすみませーん」

メイド服を着用しながらペンシルが厨房になだれ込んできます。彼女は早朝がとてつもなく弱者なので私は彼女は起こさないように寝かしていました。ある過去に無理やり起こした時には……思い出したくないので割愛します。

「おはようみんな。おつ、今日の朝食もおいしそうだね」

料理ができたころ、御身を清め、髪を整え、身支度を完了、そして整えたご主人様が食堂へいらつしやります。

「ご主人様、今日は何します？」

「あまり地下壕に籠っているとお頭がおかしくて、キノコか緑ゴケになりそうだからそうだなあ……空でも飛ぼうか」

「ごっ、ご主人様！空を飛ぶなんて正気で言っているんですか？」

「あ、魔法とかでも空を飛べたりしないんだね。まあ、ちよつとした道具を使って空を飛ぶんだよ」

「「すごいですー！ご主人様」」

朝食をおえ久しぶりに私たちは山の外の麓にできました。

ご主人様が作るという「ひこうき」というものは森の中では使うことができないということなので、車を走らせて草原まで移動することとなりました。

「よし、じゃあ作るよ。……セスナ！」

すると目前に今日まで見たことのない物質が出現しました。材質はさつきまで乗っていた自動車と似ているのですが。

「ここから乗るんだ、乗って乗って！」

ご主人様にいわれ私たち三人はその物質の中に乗り込みます。

ご主人様がタンクにガソリンのようなものを入れたのち、ご主人様

も乗り込みました。

すると次の瞬間、とてつもないスピードで期待が動き、すぐにそれが浮き上がりました。

「うぁー」

臆病なルームが悲鳴を上げ発狂し始めます。するとご主人様は、

「あれ、ルーム。ちよつと怖かったかな？俺はハワイで飛行機の操縦をしていたから全く怖がることはないよ」

「二」よくわかりませんが、ご主人様が操縦するなら安心です」

しばらくの遊覧飛行を終え、外でご飯をピクニックで食べて一日が終わりました。

※・※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

私は、アンドロイドであり機械でできています。人工知能を持っています。そのため私にはその機会を動かす源動力が必要です。なので私は毎晩ご主人様にガソリンを入れてもらいます。

「ご主人様、今日の飛行機とても楽しかったです」

「お、それは良かった。また一緒に空の遊覧飛行をしようか。ほい口イド、座って」

優しいご主人様はいつもみぎの先端に座らせてくれてご主人様のぬくもりを全身で触れることができます。

あまり大きい声では言えませんがそれは私の特権であり特許であり権利であります。ほかの二人にはちよつと申し訳ないと思っております。

「準備ができたなら王様をまた奪還する。その時はまたよろしくね」

「はい、ご主人様。私の体はご主人様が私を作り上げた時からご主人様のものです」

ガソリンを入れていただいた後は自室に戻り眠りにつきます。

ご主人様の夢を見られたらどんなに幸せなことでしょうか。

## ルームの本心

異世界に転移してはや一年。メイドたちとの生活にも慣れを感じてきて日常と化してきた。

そんなごく普通の一般的ないつもの日常の出来事であった。

「それじゃあ、ロイド。おやすみ」

「お休みなさいませ、ご主人様」

いつも通りロイドにガソリンを入れ終えおやすみなさいを言われる普通の日だった。

「さーて今日はもう寝るか」

すると、自室のドアがノックの音を出した。

「失礼します、ルームです」

こんな時間にルームが来るなんてとてつもなく珍しい。

「あれ、ルームどうかしたの?」

「ちよつとご主人様に話したいことがありまして」

ルームが珍しく険しい表情をしていたので驚いたので話を聞くことにした。

「私は、ご主人様のことが好きです。愛しています。大切です。ご主人様がいなくなつた世界なんて考えられません。ご主人様。私が考えていることはいつもご主人様のことばかりです。ご主人様は私の英雄なんです。ご主人様は私のもう、どうしようもない人生を変えてくれました。ご主人様の存在がなければ今この時点で私が存在しているかどうかすらも定かではありません。でもご主人様は私を救ってくれました。ご主人様。あなたにとってどれほど偉大で越えられない存在で尊敬に値する存在かどうかかわかっているんですか? もちろんわかっているということは私にもわかります。でも私はご主人様に言いたいことがあるのです。さて、本題に入ります。王座奪還の件ですがなぜそこまで実行にこだわるのですか? もちろんご主人様にとってそれが悲願であるということは重々承知しています。しかし、リスクのほうが多いのです。私はご主人様が王座奪還に失敗する姿なんて見たくないんです。でもご主人様。一応言ってお



きますがご主人様が失敗するとはあまり考えていません。でも前回ご主人様は王にやとわれたルーフ・ベルファに殺されています。私はもう一度ご主人様が第三者に殺害されることが恐怖なんです。恐怖で仕方ないんです。ご主人様、私はそろそろご主人様が王座奪還をしようとしていることくらいわかっています。でも怖いです。本当に怖いんです。ご主人様がいなくなった世界がもしかしたら訪れるのかもしれないと思うと最近は何も眠れなくなっています。なのでご主人様。わたくし目がこんなこと言うのは大変失礼ではならないことだとはわかっています。だとしても私は言いたいのです。ご主人様、私は今の生活で十分に幸せです。王座奪還をしないという選択はないのですか？」

ルームは珍しく泣きながら今までため込んでいた感情を吐き出したのであった。

## ルームの秘めた心

ひくひくと泣き出すルーム。彼女の姿は、ひどく感情的で、エモーショナルで、見ていられなかったので胸で抱いたのでルームのぬくもりを感じた。

俺はルームにとてつもない心配事をかけてしまったのだ。それは罪深く、やってはならないことであつたと今になって気づいた。

遅すぎる。そんなんじや遅すぎるんだ。何やってたんだ俺は。

俺は、俺がここまで気づかなかつた自分自身に深い後悔感を覚える。

「ルーム。大丈夫だ。俺を誰だと思ってる。俺は今までみんなと一緒に暮らしてきた桜柳咲蘭だ。ルーム、ペンシル、あとロイドを守るのは俺の仕事だ。だから、君たちを置き去りにして死ぬなんてことはもうしない。僕は王になってみんなを幸せにしたいんだ。4人で幸せに暮らす以上の幸せなんて俺には存在しない。だから俺は王になって一生の幸せを手に入れるんだ。ルーム。ルームはいつも俺のことを応援して、心配してくれてありがとう。ルームはとてもやさしいね。ああ。とてもやさしいとも。ルーム。俺はその応援にこたえて王になるよ。絶対に失敗はしない。失敗などありえない。失敗など存在しない。」

「ご、ごしゅっ、ご主人様」

ルームは俺のことをぎゅっつと抱きしめた。

もちろん俺も抱きしめた。

「やはりご主人様はご主人様です。ご主人様は最強です。ご主人様は神がかっています」

「ああ」

ルームの髪をなでる。するとルームの顔は赤面した。

「ご主人様はすぐにこうやって。…やさしいです。ご主人様」

「ありがとう」

「そうそう、ご主人様。あと一つ話があるのですが……」

「どうしたんだい？」

「そのおーつ。ご主人様。いや、その。嫉妬ってわけではないんですけど……」

「どうしたの?」

「いやですね、ロイドはいつもご主人様のぬくもりを感じられていいなどちよつとした不平不満を言ってみたり……」

たしかに、ロイドは毎晩俺の部屋にきているので、ペンシルやルームよりも接する回数が多くなっているような気がする。確かに、考慮が足りなかったかもしれない。確かに、それは避けなければならぬことであつた。

「確かにそうだつたね。…そうだルーム。どうすればいいかな?」

「ご主人様と一緒にデートをしたいです。二人つきりで」

「そ、そんなんでよかつたの。わかつた。じゃあ久しぶりに王都にいつて買い物でもしてこようか」

「うれしいです!ご主人様」

二人つきりでの行動。ペンシルとしたつきりであつたので、久しぶりだったので楽しみだ。

※・※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃあ、ペンシル、ロイド。この隠れ家の場所のことは頼んだよ」

「承知しました。ご主人様。私たちが責任もつてこの場所を保護します」

二人のメイドは寸分の狂いもなく正確にずれもなく同時に話した。

「ご主人様、ぜひ楽しんでいってくださいね」と、ペンシル。

「ご主人様、お土産を期待しています」と、ロイド。

「ああ。もちろん」

隠れ家を出ると、風がざああつと木々をざわめかせ、地面にはいくばくばつている虫たちが演奏を始める。

これから俺とルームは王都に行って買い物を楽しむことにした。一応王都の偵察もかねて。

## メイド・ウイズ・メイド喫茶

「ご主人様！王都にはメイドさんがいるメイド喫茶があるらしいんですよ。もしよかったですら行きませんか？」

ルームはぜひぜひといったような表情で言った。

メイド喫茶か。普段から、ペンシルとロイドとルームがメイド服をきているので、あまり新鮮味を感じないものだが、しかしながら、この世界にもメイド喫茶なる場所があることが驚きだ。

「メイド喫茶か。僕がもともといた世界にもそういう店があつたけどこっちの世界にも需要があるんだね」

「はい。メイドは金持ちの貴族しか雇えないので、それにあこがれている人が多いので、多くの人がメイド喫茶に遊びに行きます。メイドさんはみんなのあこがれですからね」

メイドへのあこがれ。二次元の作品に興味をもったひとにはそれを持つている人が多いであろう。こちらの世界のメイド喫茶というものがどのようなものが良くわからないが非常に興味がある。

「なるほどねえ。どんな店か興味があるね」

「じゃあいきましよう。私も何か学べるものがあるかもしれないからね」

「もちろんだけど、君たちに不満があるわけじゃないよ」

「さすがはご主人様です。わかってますよ」

そういって、ルームは胸をなでおろした。

ルームに連れられてたどり着いた店「メイド喫茶パーラー・シユバルツドレス」に到着した。西欧風の本でできた扉にガラスがくつついていて非常に高級そうなつくりで非常におしゃれな感じがする。そしてドアを開けると、

「おかえりなさいませ、ご主人様、姫様」

茶色のメイド服を着たメイドさんは俺とルームを見てそういった。

ただ、ルームがメイド服を着ているからか少し、ほんの少しだけ微妙な間があつた。まあそれも仕方のないことであろう。

「ご注文はいかがになりますか？」

メニューを見ると、紅茶とか、ケーキやオムライスのようなもの、スパゲッティのようなものがあつた。

この世界の料理は、俺がいた世界のものとはとてもかけ離れていたもので、あまり食べたことがなかったのであつたがせつかくなので注文をお願いすることにした。

「ええーと、ダーズリンティーと、ウロボロス卵のオムライスください」

「承知しました。ご主人様」

ウロボロス卵というものが良くわからなかったが、オムライスということなのでおいしいのであろう。

「ご主人様は意外と庶民的なものが好きなんです。隠れ家にいるときは見たこともないとしてつもなくおいしい料理ばかりお召し上がりになられているのでちよつとびっくりです」

ウロボロス卵というものはそんなに庶民的なものなのだろうか。名前だけで見ると結構高貴そうな感じがするものであるが。

「こつちの世界の料理は全然知らないんだ」

「そういえばご主人様はこつちの世界の料理を食べているのを見たことがありませんでした。知っているものは紅茶くらいでした」

確かにこの世界と元の世界で共通している飲食物は紅茶くらいであつた。なぜ、紅茶だけ同じなのだろうか。

「お待たせいたしました。利き手はどちらですか？」

「右です」

「私は左です」

するとメイドさんは利き手に合わせてカップとスプーンを置き、紅茶を注いだ。この紅茶の注ぎ方はペンシルのものと同じように非常に紅茶に詳しいといった凄みのあるものであつた。

「うん。おいしいねルーム」

「はい。隠れ家以外で飲む紅茶もなかなかおいしいです」

しばらくすると、ウロボロス卵のオムライスが運ばれてきた。

見た目は普通の卵で作った鶏卵のオムライスと同じような黄色でふんわりとした空気感があり非常においしそつであつた。

「ご主人様！見てくださいこれ。メイドさんの絵が描かれていますよ」

オムライスにはソースで書かれたメイドさんの絵が描かれていた。非常に手が込んでいるものであるということが良くわかる。

「ウロボロス卵もやっぱりよさがありますねえ」

ルームは懐かしいといわんばかりの表情でオムライスをほおぼるのであった。

ルームのおいしそうに食べる表情を見ながら、そのオムライスを食べたが、鶏卵のものとは違い少しだけたんぱくな感じの味であり癖になるような味であった。

「おいしいね。こっちの世界の食べ物をちよつと拒否していた部分があったけどもつたいたいなことをしていたかな」

「でもご主人様が教えてくださる料理は最高です！」

そして、ルームとしばらくこの喫茶店で過ごすのであった。

## ルームとのデート 誰も忍び寄らない

「ご主人様、せっかく王都に来たんですし、お土産でも探しに行きませんか？」

ルームはデザートとして注文した、ケーキのようなものを食べながらはなした。

「そうだな。ペンシルとロイドも屋敷で寂しそうにしているだろうしね」

このメイド喫茶から歩いて10分程度の場所に市場のようなものがあり、そこでお土産を探して、購入することができるという。

メイド喫茶にメイドと一緒にいるので、周りの視線から痛みを感じるようになったので、あと、冷たい視線も感じたので、メイド喫茶を後にすることにした。

「ご主人様。ごちそうさまですー」

メイド喫茶の周辺の町並みは、最初に連れてこられた駅前集落と違いおしやれな漢字がする。

最初に連れてこられた駅前の町の道路は、舗装すらされておらず、砂埃が舞っていた。しかし、さすがは王都。石畳でおしやれな舗装が施されているので非常に清潔な感じがする。

「さすがは王都だね。最初にこつちの世界に来た時はとんでもないところに来たと思ったんだけど。さすがは王都だからしつかりしているね」

「はい。まあでもおしやれなのは王都だけなんですけどね。周りを見てもわかる通り、砂漠の真ん中に人工的に作られたこの街は、王様の権力の高さをしめすために、周りの都市整備を犠牲にしてまでも犠牲にして作られた街なんです」

この国の王の噂を聞くとどうもこんなにひどい噂ばかり聞こえてくるものだ。権力のためにその国の首都だけをきれいに保たせるといふものは、以前いた世界の独裁国家がするような手法だ。やれやれ、どの世界も独裁者のやることは似たようなことしかしないものだ。

「ご主人様、その角を曲がると市場があります」

市場には、今まで一度も見たことのないような不気味な食材が並んでいた。そういえば、初めてこの世界に来た時には、ペンシルが非常に不気味な料理を提供しようとしていたことを思い出した。

でもなんか前の世界にいた感じがするな。砂糖マシマシませそばってペンシルの冗談じゃなくて本当に存在していたとは。でもなんでませそばなんてものがこの世界で食されているんだ。まあ、自分が住んでいた世界が進んでいるって決めつけるのは良くないとしても若干の不自然を覚えるものだ。

「砂糖マシマシませそばはこの王都の名物の料理ですよ。王様が発案したメニューです」

「王様が考えたメニューねえ……」

あやしい。あやしすぎる。こんな前の世界のような料理を王様が提案するとは。王の名前がなんであったか忘れてしまったが、あの時ルーフ・ベルファはこの世界の住人のっぽい名前と呼んでたと思うんだがなあ。まあ、西洋人っぽい名前ってだけで僕みたいな日本人のような名前じゃないからって異世界人って決めつけるのも早計かもしれないが……。

「ご主人様、この服ペンシルさんに似合うと思いませんか？」

ルームはゴシックロリータと表現すれば良いのかよくわからないが、黒を基調としてヒラヒラしたものがたくさんくっついていて服に指をさした。

「似合うかもしれないね。じゃあこれをペンシルのお土産にしよう！」

「ロイドさんのお土産はどうしましょうねえ」

「そうだねえ。あ、このネックレスなんてどうだろう」

「素敵です！さすがはご主人様です。ロイドさんにとても似合っていると違います。センスが違いますね」

市場で目に付いたものを購入しつつ、市場にある店を一回りしたので、日が暮れてきたので隠れ家に帰ることとした。するとルームは、「ご主人様、なんだか私はご主人様を独占しようなんて思ったことが



間違えだったかもしれない。ご主人様は私たち三人を平等に愛してくれているっていうことがよくわかりました。ご主人様、これからこんな私ですが宜しくお願いします！」

「ああ」

ルームと共に車に乗り込み、隠れ家に到着した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……どうなってるんだ？」

## 隠れ家のメイドたち

それは、隠れ家を留守中に行っているときの出来事であった。

「ご主人様がいなくなるとちよつと寂しいですね」

桜柳咲蘭が見えなくなるまで深々とお辞儀をしていたペンシルがロイドに言った。

「そうですね。ご主人様がない生活なんて考えてもみませんでしたから。半日でもご主人様がないというものは恐怖といいたましようか、なんだか心が落ち着きませんね」

ロイドは人間と同等もしくは、そこらの無感情な人間よりも感情があるのかもしれない。

「そういえばロイドって趣味とかあるんですか？」

「趣味ですか……。そうですね、ご主人様をずっと眺めていることでしょうか」

「左様でございますか」

ご主人様は、ロイドを作るときどのようなことを考えていたのかと疑問を抱き苦虫を噛み潰したような表情をするペンシル。

「私がこの屋敷に来る前によくやっていたんですけどね……」

ペンシルはおもむろにメイド服のスカートのポケットから金色のカギを取り出した。

「なんですかそれ？」

「この鍵は私がご主人様のメイドになるときにまとめた荷物を入れるために使ったトランクのカギです」

ペンシルの自室からトランクを取り出しカギを開けるペンシル。

するとそのトランクの中から将棋盤を取り出した。

「なんですかそれ。ゲームみたいに見えますけど」

「これは、私が鉄道会社に勤務していた時にとあるお客さんからいただいたもので、将棋というんですよ」

「しよぎ……どうやって遊ぶんですか？」

「ルールに従って相手の王を取るんです」

するとペンシルは紙と万年筆とインクが入っている瓶を取り出してルールをロイドに説明した。

「なるほど！それは面白そうですね」

「ただですね、ただの勝負じゃつまらないじゃないですか。なので何かを賭けましょうよ」

「そうですね。それでは、負けたほうが相手の言うことを聞くというのはどうでしょうか」

「おもしろそうですね」

そして、ペンシルとロイドは将棋の勝負を始めた。

「むむむむむ、その手を使ってくるとは」

「相手の駒を取ってそれを戦力にする。それを使いこなせばなかなか楽しいですね」

「まるでどこかの王みたいです」

「あんな低俗な存在と同等にしないでいただきたい」

二人の間から熱意のようなものを感じるようになってきた。

「そうだ、こいつを取れば！」

ペンシルその一手が引き金となり、戦況が逆転することになった。

「むむむむむむむむむ、参りました。ペンシルさん」

「それじゃあ、ロイドさん。ご主人様が喜びそうな服を作ってそれを着て下さい」

「さすがはペンシルさんです。常にご主人様が喜びそうなことを考えているんですね」

「それはもちろんです。私の心と体はあの日からご主人様のものからです」

ペンシルは将棋盤をトランクにしまうと、小さな紙がトランクに挟まっているのを見かけそれを手に取って見るとハッと驚いた顔をしたと思ったら髪を握りつぶしてポケットにしまったのであった。

## お土産

「すごいねロイド！どうしたのその服装は？」

「少しいろいろありまして……」

頬を赤らめるロイド。それはまるで夕日が燃えているような赤さだった。

「どつともにあつてるよロイド」

いつもは白黒のロングスカートメイド服を着ていたロイドであつたがなぜか、白いドレスを着ていた。

「ご主人様に気に入っていただき私はとても幸せです。ペンシルさんこれでいいでしょう？」

「そうですね。ご主人様がより幸せになつて頂き。私はとても幸せです」

するとペンシルは、俺の腕によりかかり頬を腕にくつつけるのであつたのでペンシルのぬくもりを感じた。

「そうだ、今日はお土産を買ってきたんだよ」

「本当ですか！」

二人はともうれしそうな表情で言った。

「じゃあまずはロイド。いやーこんなに立派な服を着ていてくれてとてもよかつたよ。ロイドにはこのネックレスを差し上げますよ」

「素敵です！いいんですか私がこんなにきれいなものをもらつて……」

「もちろんだよ」

ロイドの首に、とても大きなダイヤモンドがついたネックレスをつけてあげた。

ロイドが来ているドレスと色調のバランスがあつているのでとても素敵に見えた。

「すごいですーご主人様。やっぱりご主人様のセンスは最高ですね」

ルームは俺のセンスをほめてくれた。そう、率直に言われるとちよつと照れ臭くなつてしまう。

「もちろんペンシルにもお土産を買ってきたよ！」

「三人を平等に愛してくださいさるご主人様は素敵です……」

「この服なんだけど……気に入ってくれるかな」

「こ、これは！私が以前ほしかったものです！」

「おっ、そうだったんだ！イヤーペンシルなら好きそうかなって思っ  
てね」

「ありがとうございます！いま着てみてもいいですか？」

「もちろんだよ」

ペンシルが服を着替える。すると、

「とてもよく似合ってますね！」

ロイドが驚くように言った。

「ご主人様。いつも私たちのために……ありがとうございます」

ペンシルは深々とお辞儀をしながら言うのであった。

※・※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

市場で買った食材を料理し、盛大に晩餐を楽しみ、皆が寝静まった  
夜のことであった。一人のメイドが皆がねしずまったのを確認して  
トランクを持って外に出た。

「ここなら大丈夫ですね」

トランクから無線機を取り出すペンシル。それは、桜柳咲蘭がミツ  
マタで作ったものではない。ペンシルが以前から所持していたもの  
である。

「これを使うのも久しぶりです。でもこれがないとご主人様が危ない  
……」

するとペンシルは無線機につけた電鍵で次のように発信した

「――……」

――……

――……

――……

――……

――……

すると、

「

「・―・」

ノイズ交じりであるがRという意味の信号が聞こえてきた。

## 砂糖マシンマシませそば

ここ最近、僕が通っている学校の生徒が失踪している事件が多く起きている。

失踪事件の最初の失踪者となった人は、「桜柳咲蘭」だ。彼は、トラックにひかれそうな女子を助けるために、助けたのち、なぜか行方不明となったらしい。その桜柳に助けられた女性の記憶はあいまいで、支離滅裂なことしか言わないので、桜柳が彼女を助けたのちどうなったかが全く分かっていないのだ。トラックに轢かれて死んでしまったとしても、その遺体がどこにも見当たらないので、「失踪」したことになっている。

そして、その「桜柳咲蘭」の友達である、ルーフ・ベルファは彼の行方を捜している最中に行方不明になった。聞くところによると、とある児童公園で彼の姿を見たという証言がある。

「うーん。この展開！絶対になんかの力が働いているに違いない！」  
桜柳とルーフ・ベルファと同じ高校に通う俺、「坂城琢真<sup>さかきたくま</sup>」はこの事件について解決したいと考えている。

そのため、放課後になると、僕は文芸部員なので、文芸部にあるコンピュータをインターネットに接続して、掲示板などで情報をあさっている。

……のであるが、その二人の情報が全くといってよいほど出てこないのだ。

どうにかしてその二人にもう一度会いたいと考えているので、この町の周辺での不思議な出来事をあさっているのである。

「なんか、不思議なことないかなー」

このようなことを考えていると、部室のドアを開けた一人の女子生徒が入ってきた。

彼女はこの文芸部の後輩である「霧ヶ峰」である。

「先輩先輩、聞いてくださいよー」

「どうしたんだ？」

「今日弁当を忘れてしまって学食で昼食を済ませようと思ったんです

けど食券がなぜか売り切れていたんですよ。いつもは販売終了時刻ぎりぎりになっても売り切れる気配がないのに、今日に限ってHR前の時間にもかかわらず売り切れていて。私はもうおなかですいてしまいましたよ」

霧ヶ峰は、僕に何かをおごってくれと言わんばかりの表情で見つめてくる。

彼女は僕をATMか何かと勘違いしているのであろうか。しかし、彼女がどうしてもかわいそうに見えてきたため、僕が優しいので、ごちそうすることにした。

「たく仕方ないな」

「あ、ご馳走してくれるんですか！さすがは坂本先輩！優しいです。高校の近くの公園の隣に、おいしいラーメン屋さんあるですよ。そこ行きませんか？」

「らーめんか。いいよ安いし。」

ということなので、僕と霧ヶ峰はラーメン屋に行くことになった。ラーメン屋のメニューを見ると、家系ラーメン、中華そば、まぜそばとどこにでもあるようなメニューであると思っただがなんと、裏メニューとして「砂糖マシマシまぜそば」と書かれている紙が堂々と壁に貼り付けられていた。裏メニューをうたっているのにもかかわらずこんなに目立たせるのはいかなものであろうか。

「先輩！この砂糖マシマシまぜそばおいしいんですよ」

「まぜそばに砂糖って正気なのか？」

「えっ？先輩食べたことないんですか？おいしいんですよ」

怪しい、非常に怪しい。なんでまたまぜそばに砂糖なんて入れるんだ。普通の味覚を持っていればそんな考えは思い浮かばないと思うのであるが。

「そうですね。でも先輩、甘いものに砂糖をかけることってあるでしょう？スイカに塩を振りかけたり、醤油に砂糖を溶かして餅につけて食べたり。ってことでまぜそばもおいしいですよ」

「どんな理屈だよ」

ということ、砂糖マシマシまぜそばを注文した。



「そういえば、隣の公園だよな。ルーフ・ベルファがいなくなった場所って」

「そうですねえ。この公園ですねえ。嫌な思い出があります」

「嫌な思い出ってどんな？」

「知りたいです？」

彼女の視線は、上目遣いの視線であった。

「ああ」

「じゃあこのまぜそばを食べ終わったら……」

ということなので、まぜそばを食べたが味はもちろん。まずかった。

「いやーおいしかったですね。じゃあ、嫌な思い出について。」

霧ヶ峰が少し微笑んだ。すると俺は体全体に電流のようなものが働き、意識がなくなってしまった。

## DE

「……先輩、そろそろ起きてくださいよ」

遠い意識の中かすかに、後輩「霧ヶ峰」の声が聞こえる。

自分の記憶が正しければ、ませそばを食べている最中電流が走り気絶していたのだが。

ついに意識が戻ったのであろうか。

目を開けてみると、視界に後輩の蔑むような眼が視界に入った。

「先輩、そろそろ足がしびれてしまうので起きてほしいのですが」

「え？あつー申し訳ない」

無意識のうちに後輩の膝枕で寝ていたらしい。

「ここはどこだい？」

眼前にはお湯が沸いているやかんとその下にあるストープ、そしてボロボロのベンチが見えた。どうやらここは、駅舎のようだ。一日に3本しかない列車の時刻が書かれている時刻表がある。改札の隣にはさび付いたシャッターにより閉ざされた窓口のようなものがある。ここは無人駅になってしまった駅なのであろう。

「ここは……そうですね、わかりやすい表現で言えば異世界に通じる列車へ乗車するための駅です」

「はあ。」

後輩が言っている内容が自分には理解できなかった。

異世界に通じる列車ってなんなんだ？

「それは、私の口から言うことはできません。しかし、先輩が元居た世界とは違う世界に行くことになっています。あなたの制服の内ポケットには切符が入っているでしょう？」

後輩の言う通り制服の内ポケットには乗車券が入っていた。本当に異世界に行くことになっているらしい。

「なんでまた僕なんか異世界に？」

「あなたが必要だからです」

「僕が必要だ？」

全く意味が分からない。なぜ僕が必要なんだ。僕の代わりなんて

いくらでもいるのではないか。僕は、どこにでもいるようなごく普通の一般男子の高校生だ。

「とにかく行けばわかります。私についてきてください」

「そうか」

霧ヶ峰についていくと0番線と書かれたプラットホームへ連れていかれた。

空には真つ白な雲がどんよりと広がっていて青空は見えない。雲量100といったところだ。

ここはターミナル駅のようなのでこの駅でレールは途絶えている。周囲は山に囲まれていて、駅を出るとすぐにトンネルに入るといった構造になっている。

「あとどれくらいで列車が来るんだ？」

「もうすぐきますよ」

するとトンネルの中から赤いディーゼル機関車が見えてきた。

4両編成のブドウ色の客車はホームに停車した。すると、ディーゼル機関車は客車と切り離し、機回し線に入り列車の先頭に機関車を付け替えた。

「乗りますよ」

後輩は、客車の扉を開けて車内に乗り込んだ。

「あ、この客車自動扉じゃないのか」

旧型客車の本来の運用をしている本当に昔ながらの列車だ。走行中にも扉を開けられるまさに旧型客車というものだ。

青色のモケットが張られたボックスシートが整然と並んだ車内。霧ヶ峰は、真ん中あたりの席におもむろに腰かけたので自分は向かい合わせの席に座った。

「もう少し段階を踏もうとは思っていたのですがいきなりになってしまいました。すみません」

霧ヶ峰は、申し訳なきような顔をする。

「いや、別に……事情があるんだろう」

こっちにはいろいろ聞きたいことがある。こいつの機嫌を損ねると話ができなくなってしまう可能性があるるので慎重にいかなければ

ならない。

機関車が汽笛を鳴らすと列車はガチャリと音を立てて動き出した。

## 星空

後輩と僕を乗せた列車は、トンネルに入り10分ほど経過した。ガタゴトと短いレールをゆっくりと一定のリズムで刻んでいるその音は、僕と霧ヶ峰の間に流れる空気を重くしている。

——なかなか言い出せない

なぜ自分は、異世界に行かなければならないのか。なぜ僕が必要とされているのか。それが全くわからないのだ。

霧ヶ峰は車窓をじっと冷たい視線で眺めているので、余計に話しかけにくい。そう思ったその時であった。

「先輩って、中学のとき何を趣味にしていましたか？」

突然の子の一言に少し驚きを隠せずにいる自分がいた。

「趣味カーツ。趣味と言えるかどうかかわからないけど、LINEのグループで友人同士で小説を書いていたことがあったなあ」

中学の頃、仲が良かった友人。そう、ルーフ・ベルファと桜柳咲蘭と一緒に小説を書いているのは、批評し合っていたものだ。

「先輩が小説ですか……いえ、何でもありませんがその……先輩が小説って意外ですね」

ところどころ笑いを隠しながら言う霧ヶ峰。さつきまでの、重苦しい空気が少し、ほんの少しながら和らいだのがわかった。

「ルーフ・ベルファは、いわゆる、戦闘ものって言えばいいのかな。ラブっぽい作品をよく書いていたよ。桜柳錯乱は、異世界に転生して、メイドさんとイチヤイチャするような話を書いていたね」

すると霧ヶ峰は、

「なんか本当に中学生って感じですねえ。ちなみに先輩はどんなものを書いていたんですか？」

「それは内緒」

自分が描いた小説の内容は、非常に恥ずかしいので、あまり人には言いたくない。本当にあの頃の自分はどうかしていたのだ。ああ早く忘れたい。

「他人の黒歴史をばらして、自分のことは隠すなんて、本当に先輩らし

「いすね」

「うるさい」

そうこうしているうちに、列車はトンネルを抜けた。

「うわあナンダコレハ！」

車窓には、一面に星空が広がっていて、まるで宇宙空間にいるかのようであった。すると霧ヶ峰はこういった。

「この世界はあなたの……そうですね、夢と現実の狭間にある空間です」

「はい？」

僕は霧ヶ峰が入っていることが、何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「今から私達が向かう世界は、先輩の記憶の中に確実に存在した記憶をもとにして作られた世界なのです。なので、夢と現実の狭間である、このような空間を経由する必要があります。異世界に行くことができる人物は、先輩が元いた世界の元住人三人です。その三人により、これから向かう世界は作られたものなのです。つまり、私達がこれから行く世界は、その三人により未来が左右されるのです。これから私達が行く世界は非常に不安定で、もろく、デリケートな場所です。その世界の未来をささえ、正しい方向に持って行かせるためにも、先輩を初めとした三人の協力が必要不可欠であったのです。しかし、一人目は頭のネジが一本。いいえ、すべて狂い、ゆるみまくっているような人で、全く当てになりませんでした。それとあまり思い出したくないのですが……いいえ、この話は後におきます。さて、もう一人はですね、欲望が強すぎて、正義感の方向が狂っているといましようか、盲目的な人なんでしょうかね。まあとにかくおかしいんです。そのようなことなので、残りの一人である先輩の力が必要です。」

霧ヶ峰は、原稿用紙1枚を軽く超過するかの勢いの分量で、今自分が置かれている状況を説明してくれたのであったが、

「ごめん、全く理解できなかった」

「……まあ、先輩ですし、そのようなものだと思ってましたよ」

「悪かったな」

「……とりあえず、この列車を乗り換える必要がありますので降りる支度をしてください」

そういうことなので、列車を降りる準備をしていると、列車は星空空間の中の駅に停車した。

するとホームの向かい側には、青い客車と蒸気機関車が停車した。

先輩の事は信頼していますが、上段に上ったら蹴落としますよ

客車の入り口には星のマークが3つ記されていた。

SLがけん引する寝台列車というものもなかなか趣があるものだと感心していると霧ヶ峰は、

「この寝台列車に乗って、桜柳咲蘭がいる世界に行きます。11時間程度の長い旅になりますが寝台列車ですので快適に移動できると思いますよ。」

11時間か長いな。現在の時刻を駅のプラットフォームの時計で確認してみると、午後9時半を示していた。

「30分後に出発しますので買い物でもしましょうか」

霧ヶ峰に案内されたので、駅舎の売店へと案内された。

するとそこには、マヨネーズクッキー、ゴキブリの素揚げ、ミルワームの岩塩焼き、砂糖マシマシ油そば、チョコレート焼きそばパン、シヨートケーキカップラーメンといったわけのわからないものが置いてあった。

「おい、この世界の食事はどうなってるんだ？」

「ひどいですよねこれ。まあ砂糖マシマシ油そばはおいしいからいいんですけど」

そんなに砂糖マシマシ油そばが好きなのか霧ヶ峰は。僕にはその感覚を理解することがあまりできない。メニューに絶望していたのであるが、店の隅つこの冷蔵庫の中に牛タン弁当があったのでそれを購入することにした。

「牛タン弁当もなかなかおいしいですよね」

霧ヶ峰にもマトモな味覚を持っていたようで安心する。

なんだかんだで30分があつという間に過ぎ、ベルがホーム上に鳴り響いたので列車の車内に入ることにした。車内には古い客車特有の独特な消毒液のにおいが漂っていた。



そして僕たちは、2段ベットがある個室で寝ることになったのであった。霧ヶ峰が上段で僕は下段だ。

「なんか昔の列車って感じがするね。どうしてこんなに、その、僕の趣味にマッチしているような鉄道が走っているんだ？」

「さあなんででしょうね」

霧ヶ峰はその理由を聞くなといわんばかりの笑顔で答えるのであった。

この世界はいったいどうなっているのやら。

食事を終えた後、シャワーを浴びて列車内を徘徊していると車内の電灯が消されたので部屋に戻ることにした。

寝巻に着替えた霧ヶ峰は、

「一応先輩のことは信頼していますが、上段に上ったら蹴落としますよ」

「はいはい」

そして長い列車の旅が始まったのであった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

一方そのころ、桜柳は、王座奪還の準備を始めていた。

「ご主人様、持っていくものはミツマタだけでよかったですか」

ルームは桜柳に尋ねる。

「ああ」

ミツマタ。それはこの世界ではどのようなものにも変化できる代物だ。

「これがあれば何も怖くない」

桜柳は自信満々に高らかに声を昂らせていった。

「さすがは、ご主人様です。ミツマタを持っているご主人様、いいえ、ご主人様に怖いものなんて何一つありませんね」

ペンシルが赤面を紅潮させながら言った。

「もう今回はみんなを危険な目には絶対に会わせないよ」

そういうことなので、ルームとペンシルあとロイドにスマートフォン

ンを作って渡した。

「これは俺が以前暮らしていた世界で広く普及していたスマートフォンというものなんだ。こいつを持って異世界に転生した人は高確率で王またはそれに準じた、もしくは、それ以上の地位に着くっていうとてつもない実績があるシロモノなんだ。こいつがあれば絶対安心さ。」

「すごいですー私たちの王さま、ご主人様！」

スマートフォンは異世界では欠かせないアイテムとなりつつある。ということなのでミツマタを使ってスマートフォンを作ってみたのであるがここで問題点が生じた。電波がないのだ。以前ペンシルに渡したトランシーバーは基地局を必要としないものなのであるがスマートフォンは基地局を必要とするのだ。したがって、スマートフォンを今の時点ではまともに利用することができない。

ということなので、基地局の代替品となる移動基地局車も作り上げることにした。

「ご主人様、なんですかこれは。前回ご主人様が作ってくださいった自動車に似ていますけど」

大型トラックの移動基地局車を見上げながらルームは俺に質問した。

「これは、さっき渡したスマートフォンを使えるようにするために必要な自動車なんだ」

「なるほどーさすがはご主人様です」

そして、俺と三人のメイドは移動基地局車に乗車して王都に出撃することとした。

## 王座奪還前夜祭

(坂城SIDE)

ガタゴトと音を鳴らしながら列車がゆらゆら揺れている。僕たちが乗車しているのは電車ではなくて客車なので、車内にはモーターの音は聞こえてこない代わりに、鉄の車輪と鉄のレールがぶつかり合う音が静かに響き渡っている。

これから、どんな世界にかされるのかという不安にオロオロしているので寝付けられない。なので、冗談にいる霧ヶ峰にでも話しかけようと冗談に行くためのはしごに足をかけたが寝る前の一言を思い出したので躊躇することとした。

「先輩、全部見えてますよ」

まずいところを見られてしまった。

「さすがに先輩が、そういうことをする人だとは思ってましたけど思ってませんでしたよ」

何言っているかわからないが、褒められているわけではないだろう。

「あの、その、これは、あなたに手を出そうとしたんじゃないからね、その……」

霧ヶ峰は、ため息をつき、

「上にながらないでくださいといった理由は、それではなかったんですが一応。先輩はそういうことを考えていたんですね」

「ってそういうことじゃなかったの？」

霧ヶ峰は鼻で笑っているのがわかった。どうやら僕はカマをかけられたみたいだ。

「冗談ですよ。先輩がそんなことする度胸がないことくらいわかってますって。それで、どうかなさったんですか？」

霧ヶ峰が起こっていなかったように胸をなでおろす。

まったく、ヒヤヒヤしてしまうよ。

「そのさ、眠れなくて」

「そうですか、まあ私もそんな感じでしたよ。急に異世界に行くこと

になってしまいましたからね」

「ん？霧ヶ峰に取つても急だったの？」

「はい。異世界から呼び出しがあったのは急な話でした。私が部室に行く直前の話でしたからね」

それはとても意外だった。霧ヶ峰はずつと前から僕を異世界に行かせることを企んでいたのだからと思っていたのだがその考えは間違っていたようだ。だとしたら、なぜ霧ヶ峰は異世界から呼び出しをされたのだろうか。

「なんつて言えばいいかな。霧ヶ峰つてその、生まれは以前僕たちがいた世界なの？」

「はい。私は普通のどこにでもいる学生でした。しかし、ある日を境に普通の学生ではなくなり、現在のように異世界から交信を受けるような身になりました」

「どういう意味？」

全く意味がわからない、異世界から交信を受けるような身つてどういうことだ？

「私が、異世界からの交信を受ける能力を授かったのは1年前のことでした。中学三年生の頃にふと異世界と交信することができる能力がいきなり芽生えたんです。最初は何が起こっているのか全くわかりません。とても不安でした。異世界自体は小説とかアニメの影響で憧れていたんですけど、実際その異世界が身近になるとするのは不気味なものでしたね」

1年も前からそんな能力を持っていたのか。その不安というものは実際に自分が経験したわけではないのでその具合がよくわからないのであるがとても心理的に負担はあったのであろうと察する。

「話は変わるけどどうして文芸部に入ろうと思ったの？」

「それは、その。異世界が身近になったので面白い話が書けるかなと思ひましてね。あと、異世界に興味がある人とかもいるかなって」

意外と異世界についてまだ好意的な感情を持っているようだった。

「なるほどね。これから一緒に暮らす異世界、仲良くしようね」

「そうですね。はい。」

霧ヶ峰は笑いながらそう言ったのであった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

星空空間なので、夜が明けたという感覚はなく、車窓から見える景色は一面の星空であるのだが、車内放送の車掌のアナウンスによると朝を迎えたようだった。

「先輩、おはようございます」

いつの間にか寝巻きから、昨日着ていた制服に着替えた霧ヶ峰が降りてきた。

「ああ、おはよう」

「朝食を食べに行きましょう。食堂車は7号車です」

「うん。行こう」

支度をしたのち僕と霧ヶ峰は食堂車に向かった。朝食の内容は、ごく普通の洋風の朝食といった具合だ。あと、紅茶があった。

「あ、意外と普通な感じなんだね。さっきの売店を見たときはびつくりしたんだけど」

「先輩が、あのようなメニューがお嫌いということでしたので昨日のうちに手配しておいたんですよ」

「あ、そうだったんだ。どうもありがとう」

何か違和感がある。しかし、その違和感がどんなものなのかがよくわからなかった。

「あと、1時間ほどで到着します」

霧ヶ峰は淡々というのであった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

列車がいつの間にかトンネルに入りしばらくするとトンネルを抜け、車窓が明るくなった。

「先輩、これが異世界ですよ」

「意外と変わらないもんだね」



「ああ」

そうして三人は掘削機をミツマタで作り、地下通路を掘り始めた。





「ご、ご主人様あ、もしかして私のことが嫌いになってしまったんですか?」

「いや、そうじゃないよ。うん、そうじゃない、そうじゃない。いや、なんというかね。うれしいんだけどちよつと早いというか、心の準備がっついていうか」

するとルームは艶めかしい表情をしながら、

「私はあの日からご主人様のものです」

「ルームよ、こんなことは気軽に言うもんじゃないよ。こんなこと言って喜ぶのは、俺TEEEEEEとか言っているようなゴミ主人公みたいなんだ。僕は、そんなことを言ってもらわなくても、ルーム、ロイド、ペンシルと一緒にいられることがすごくうれしいんだ」

「さすがです、ご主人様!やはりご主人様の考えは素晴らしいです。感動してしまいます」

ルームの瞳からは暖かいものが流れ出ていた。

したがって、それを指ですくい上げた。

「それじゃあ、朝ご飯を食べようか」

今日の朝ご飯は、卵かけご飯と、みそ汁と、イワナ塩焼きといった質素なものであった。

「おいしそうだね」

「新鮮な鶏卵の卵が手に入ったので今日は卵かけご飯にしてみました、たれにこだわったのでおいしいと思うんですが」

今日はペンシルも目覚めが良かったようなので、ペンシルが最初から最後まで料理をしたようだ。

「ご主人様、紅茶はいかがですか?」

「うん。イングリッシュ・ブレックファスト・ティーがいいかな」

「かしこまりましたご主人様」

ロイドはお湯を沸かして紅茶を作り始めた。

「なあ、ペンシル、俺の欠点って何だと思う?」

「ご主人さまに、欠点なんて存在しませんよ」

ペンシルは、当然でしよといわんばかりの表情でささやいた。  
「どうなのかねえ」

「だってそうでしょう。ご主人さまはいぜん、らいとのべるといふものをミツマタで作ってくださいりましたが、その本に書いてあるハーレム系の主人公にはとんでもない人間のような人が多いかったですからね。朝起きたとたん胸をもみ始めたり、女の子を脅して無理やり契約させようとしたり、人として終わっている方が多いです。でもご主人様は、そんなことをせずいつも私たちのあこがれの存在でいてくれます。でもでも、ご主人様はどんなことをしても私たちの尊敬の存在です。」

「なんやかんやで朝食が終わり、暇な時間になったので、今日は団子を作ることにした。」

「ご主人様、なんですかこれは？」

もち米と、大麦・小麦・粟・キビ・ヒエ・ソバ・トウモロコシ・小豆・サツマイモ・栃の実を砕いたものをミツマタで作り上げた。

「今日は団子を作ってみようと思うんだ」

「ご主人様、だんごってなんですか」

「うーん。まあ見ればわかるよ。僕がいた世界では胃を鍛えるためにもつかわれたらしいよ」

「さすがはご主人様です。王座奪還できたえなければならぬわたしたちのことを思っているのですね」

団子を丸め、ふかしたのでそれにきな粉とかあんこをつけて3人で食べた。

「おいしいですご主人様！やっぱりご主人様が作ってくださいる料理はとてもおいしいですね」

「ご主人様に拾ってもらって私は幸せです」

「ご主人様！ありがとうございます」

団子を100個程度食べおなかがいっぱいになったので、ペンシルにガソリンを給油して寝ることにした。



「それじゃあ、朝ご飯を食べようか」

今日の朝ご飯は、卵かけご飯と、みそ汁と、イワナ塩焼きといった質素なものであった。

「おいしそうだね」

「新鮮な鶏卵の卵が手に入ったので今日は卵かけご飯にしてみました、たれにこだわったのでおいしいと思うんですが」

今日はペンシルも目覚めが良かったようなので、ペンシルが最初から最後まで料理をしたようだ。

「ご主人様、紅茶はいかがですか？」

「うん。イングリッシュ・ブレックファースト・ティーがいいかな」

「かしこまりましたご主人様」

ロイドはお湯を沸かして紅茶を作り始めた。

「なあ、ペンシル、俺の欠点って何だと思う？」

「ご主人さまに、欠点なんて存在しませんよ」

ペンシルは、当然でしよといわんばかりの表情でささやいた。

「どうなのかねえ」

「だってそうでしょう。ご主人さまはいぜん、らいとのべるというものをミツマタで作ってくださいりましたが、その本に書いてあるハーレム系の主人公にはとんでもない人間のような人が多いかったですからね。朝起きたとたん胸をもみ始めたり、女の子を脅して無理やり契約させようしたり、人として終わっている方が多いです。でもご主人様は、そんなことをせずいつも私たちのあこがれの存在でいてくれます。でもでも、ご主人様はどんなことをしても私たちの尊敬の存在です。」

なんやかんやで朝食が終わり、暇な時間になったので、今日は団子を作ることにした。

「ご主人様、なんですかこれは？」

もち米と、大麦・小麦・粟・キビ・ヒエ・ソバ・トウモロコシ・小

豆・サツマイモ・栃の実を砕いたものをミツマタで作り上げた。

「今日は団子を作ってみようと思うんだ」

「ご主人様、だんごってなんですか」

「うーん。まあ見ればわかるよ。僕がいた世界では胃を鍛えるためにもつかわれたらしいよ」

「さすがはご主人様です。王座奪還できたえなければならぬわたしたちのことを思っているのですね」

団子を丸め、ふかしたのでそれにきな粉とかあんこをつけて3人で食べた。

「おいしいですよご主人様！やっぱご主人様が作ってくださいる料理はとてもおいしいですね」

「ご主人様に拾ってもらって私は幸せです」

「ご主人様！ありがとうございます」

団子を100個程度食べおなかがいっぱいになったので、ペンシルにガソリンを給油して寝ることにした。

何かがおかしい。そう思い始めた。

今日の出来事は以前もみたことがある。

「もしかして」

廊下に出て目の前にあるペンシルの部屋に入った。

「ご主人様、私のところに来てくださったんですね。私はこの日をずっと楽しみにしてきました」

「いや、そうではない。ペンシルまさかとは思うんだが、俺の記憶を操作してないか」

ペンシルはハッと驚いた顔をした。

「どうしてこのことに気づいたんですの？」

「君は以前、自由とは永遠に一緒に暮らすことって言ったよね」

「はい、私にとつての自由とはご主人様と一緒に、永遠に過ごすことだったんです」

「そうだったんだな。ペンシル。お前のやさしきはじゆうぶんによくわかった。でも俺は君と新しい思い出を作りたいんだ。だから、新しい明日を迎えたい」

「わかりました、ご主人様。やはりご主人様にはかないません」

そして、今まで見たことがない朝を迎えることができた。

あとがき↓ここまで読んでくれてありがとうございます。ぜひ、

最終回までお付き合いください。

## 最終章のカタストロフィーな結末を迎えた終演

とうとう戦争の火種が始まった。

異世界での王座はく奪の火。

それが今日行われる。

待ちに待った今日という日の夕方。黄昏の風を一身に浴びながらその時は来る。

この世界の王になり俺、桜柳はこの世界を自分のものにしていきたい。

もう俺に畏怖を抱かれるものなどいるはずがない。

全てはこの一万円札ミツマダが全てを万事解決してくれる。

俺がこの世界で世界最強！そうであるはずだった。

そう、はずだったのだった。

「お、お前は桜柳咲蘭なのか!?!」

眼前に立つ友人。中学と高校と同じ学校だった俺の数少ない友人。坂城琢真という友人に出会った。(さっきまで寝台列車に乗っていた人)

「ああ」

坂城のその瞳から俺のことを懐かしい人を見るような目をしながら言った。

「どうしてお前がこんなところにいる理由は何だよ?」

俺は今の状況がどのような状況なのか理解することができずに飲み込めなかった。

「お前この世界が何者かによって作られたかをご存知ですか?」

「はっ」

俺は奴の言っていることが理解できないので、何とか理解しようと頭を回転させるので、それでもやはり理解できなかったの、俺はそれしか答えることができなかった。

「ご主人様、どなたですかこの方は」

ルームは不安げな声帯を震わせて言った。

「ご主人様、この方はご主人様を惑わせる敵の味方でしょうか」

炭素が含まれない無機質な声でロイドが言った。

「こいつは俺の友人であつたんだよ」

「ああ、あの時間は娯楽のような楽しさだった。記憶がおかしくなつたので、頭から重要な記憶が消失して消えているので、俺がこれから教えようとしている」

「おつ、俺が記憶を失っているだと。ミツマタを持つ俺が記憶を忘れるわけがない」

怒髪天になりそうな思いを隠そうとしないでいらだつて、重要なことを話さない坂城の態度に苛立ちを隠せずにした。

「ご主人様はこの異世界を創設させた創設者にして生みの親であります。ただ、様々な外的要因の艱難辛苦があつてご主人様がこちらの世界に転移する際に記憶を真っ白な原稿のようにクリーンにしてフラットにさせていただきました。」

それはペンシルの声であつた。

「ペンシルお前」

どういうことだ？そう言おうとしたのだが、

「桜柳くんは私の思いなんて全く理解していなかった！」

それはいつもとは違かつた。いつものようなメイド口調ではなくなつたペンシルの罵詈雑言のような驚嘆な嘆き声であつた。こういうともと違う声は私の脳を混乱させ理解するのに苦しみを覚えさせようとした。

「おい、ペンシル！お前はまさか？中学の頃LINEグループで一緒に小説を共に創造し執筆していた、雪ヶ峰だつたのか？」

「記憶が忘却しないで済んだんだね。あたしは桜柳咲蘭くんともっと話しかつたの。中学の時はまるで花びらがひらひらと舞っているようだった。みんなが小説を書いて批評しあつてお互いの向上心を遥かなる高めに向けてお互いを競い合つていく。こんな心が踊り狂うような楽しい集団はたとえ雲の中や五里霧中を探してもここしかないんだつて思つてたの。中学2年生のあの時間帯が永久に永続的



にあつたらいいなっておもつたの。でも時間という名の運命はそれを許容しなかった。受験勉強が始まってあのグループ内での競い合いはいつの間に荒廃していった。受験勉強が終わった後、それぞれの進学先に進学したかと思えばもうあの集団の会話は皆無に衰退していった。私はそんな状況が寂しくて、寂寞間に包まれて、孤独感にさいなまれていたの。もう一度あのグループでの楽しい時間の想像を再現したいと思つたの。それができなければ、せめて大好きな桜柳くんにもう一度会いたかった。だからこの世界を創造したの」

すると黒髪でメイド服姿だったペンシルから光が放たれ、止まることのない光の粒は乱反射し、以前見たことがある銀髪の少女に変わった。

「そんな、だったら実際に会いに来てくれればよかつただろうに。どうしてそうしなかつたんだ？」

「それはできなかつた。私は高校に入学してすぐ親の都合で急に海外に行くことになって。それである日私はふと異世界を作り上げる能力を得たの。信じてもらえないかもしれないけど信じてほしい。それがこの世界がこうして存在する理由だから」

「なるほど」

あまり腑に落ちないのであるが確かに実際にこうしてこの世界が作られているのであるのだからそうなんであろう。

そう自分で納得していたのだが、今まで口を閉ざしていた坂城が口を開いた

「おれと、おまえと、ルーフ・ベルファ。あと雪ヶ峰。この四人のメンバーで小説を書いていたんだつたな」

「ああ」

あのグループでの時間は俺にだって楽しかつた。でももう一度あのグループで発言しようと思つたがなぜだか何を言えばいいのかわからなかつた。なので発言しなかつた。

「たださあ、雪ヶ峰。僕の後輩の霧ヶ峰と君とはどういつつながりがあるんだ？」

霧ヶ峰はニヤリと笑つた。そして雪ヶ峰が、

「じゃあ一つ質問するけど、霧ヶ峰さんの思い出ってどんなのがある？」

「そりゃあもちろん、文芸部の後輩としてずっと……あれ、おかしいなそれ以上の記憶が」

坂城は霧ヶ峰を思い出そうとしたのであったが思い出すことは不可避であった。

「霧ヶ峰さんは坂城くんをこの世界に連れて行くために作ったアンドロイド。いわゆる機械ね。より簡潔にこの世界に連れて行くために坂城くんの記憶を少し変えさせたの」

「そうだったのか」

「いや、さすがにバレるかなって思ったんですけど以外とバレないもんですね。先輩のそういうところ嫌いじゃないですよ」

霧ヶ峰は悪戯な笑みを彷彿させ、こう言ったのであった。やれやれ、すっかり騙されてしまった。

まるで猫をかぶっているようだ。

「さすがは、ペンシル。いや、雪が峰。記憶処理を持つ処理能力の力の持ち主なだけあるね」

ルーム「よく覚えていましたね。さすがはご主人様です。私は忘れかけていましたよ」

「私が記憶操作を二度目をしかなかったからそれも仕方ないね。ルーム」

一呼吸をし、深呼吸を置いたのち、雪ヶ峰（ペンシル）は話を続けた。

「この世界には楽しい楽しさがいっぱいあるの。悪の王様の一族がこの世界を支配していてそいつを倒して我々共々王様になることもできるし、一万円札の原材料として幅広く見識が伝聞されているミツマタでどんなものだって有象無象として作れる。私はこの世界でみんなと冒険をし旅してみたいの。唐突にここの世界に騙し討ちする形式で連れて行ってしまったのは大いに申し訳なく思ってる。でも、でも、みんなならきつとこの世界で楽しんでくれると思って」

「ああ。僕もそうしたいよ。君と、ルームとロイドともつとこの世界

で楽しみたい。どうだ？坂城は」

「そうだね。この世界は前世の世界線の世界よりも面白いかもしれない」

「ここから始めましょう！私たちの異世界冒険を！」

雪ヶ峰は空を背に受けながら高らかな声でこう言つて、ルーム、ロイド、坂城、霧ヶ峰、桜柳、雪ヶ峰、あと復元した修復世界のルーフ・ベルファの異世界の冒険の始まりが始まることになった。

そして、彼らの楽しい日々は永遠に続くのであった。

「いや、また」

ペンシルによる記憶操作に対する解毒剤を服用し記憶処理が解かれた桜柳は脳裏の表側の一角にふと思いついたことがあった。

「雪ヶ峰よ、この世界の生みの親は俺だつて言つたよね。そういえば」  
「そうでしたね。はい。この世界の生みの親は桜柳くんであつたよ」

「このミツマタで異世界無双する展開も、メイドハーレムする展開も、あのとときのLINEグループに投稿した話の内容じゃないかよ！」

「はい。その通りです」

雪ヶ峰は当然でしよと言わんばかりの表情で言つた。

これ以上は黒歴史なので、これ以上話してほしくなかったので霧ヶ峰の口をふさいだ。

「まあ、それは昔の思い出だな」

「さすがはご主人様です！常に過去に目を背けた未来志向なんですね」

雪が峰はペンシルのような口調を変えて言った。

「なんだか今まで君がその口調で話してたとなると考えるものがあるねえ」

「ペンシルも私も同じ思慮と思考を兼ね備えを持った「私」が考えたことだわ」

「えっ?」

雪ヶ峰は桜柳の頬に口づけをつけた。それは人が持つ適温な体温出会った。

「本当に本当の私、正真正銘の雪ヶ峰からのファーストキスですよ」

目の前がまるで新品のキャンパスのように純白になっていた、そのとき、

「ご、ご主人様まあん。わ、私のことも捨てないでくださいね」

「わっ、私のことも……」

ロイドとルームは不安げな表情をしながら両腕に抱き着いてきた。

「ああ、もちろん。ここから異世界冒険を始めよう!」